LA REVUO ORIENTA



エスペラント語研究雑誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII
N-RO 3

第八年 第三號

MARTO
1927

目 次 (ENHAVO)

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14
東京市牛込區新小川町三ノ十四 財團法人 日本エスペラント學會
[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

☞ 本誌掲載の記事は總べて無斷轉載を禁ず

本年度本誌の諸計畫

1. 臨時增刊『エスペラント初步入門講義』を四五月頃會員に無料で頒つ。
これは其後の入會者へも殘らず無料頒布します。これは從來の講義のやうなほしでなく全然ロォマ字さへしらぬ人にも判りやすく說明し A.B.C. から委しく講義したものですから今後はエス語をまだ習ひ初めない人でも學會の會員になればこれで勉强できるわけです。

2. 『エスペラント初步練習課題講義』三月號より連載
之は上の臨時增刊中の練習問題的のものの講義をのべた初步の讀物です。

3. 『エスペラント初等講義』を一月號より每號連載すること
これは上の臨時增刊に次ぐ程度の初學者向の講義です。

4. 連譯小說掲載——國木田獨步氏の運命論者をエス界の知名の士に每號分擔して譯譯して載いて連載す。

5. 卷頭言は每月エス界の知名の士にお願ひして御寄稿を願ふこと。

6. 記事はつとめて每號讀み切りのものとし。同一の標題でも每號全然連續的のものでないものを掲載。

新入會員を御勸誘下さい

一人でも會員が多くなればそれだけ學會の經常費が增加しますからそれだけ宣傳の方へ流用できることになります。一人でも多く御勸誘下さい。

—— ☆今が入會の好機です★ ——

今一千八百名程の會員を本年中に三千名にしたいと思つて努力してをります。會員の一人が一人を新しく勸誘されたら立ち所に三千名になります。

財團法人 日本エスペラント學會編輯部

財團法人 日本エスペラント學會理事會及評議員會開催

去る1月15日學會にて評議員會を開催。議題は (1) 昨年度會計報告 (2) 本年度豫算の編成 (3) 新理事推薦 (4) 本年度の諸計畫等につき談合せり。

去る1月27日主婦の友社樓上にて理事會開催。(1) 昨年度會計報告 (2) 本年度豫算の承認 (3) 理事長改選(中村理事長重任の事に決定) (4) 本年度になすべき事業につき意見交換其他。

◆會費前金切の方々へは Revuo の封筒の上へ「前金切」の朱印を押してお送りいたしますから、遲滯なく新しく御拂込をねがひます。何分會費が唯一の財源たる當會の實狀をお察し下さいましてお拂込下さい。

◆贊助會員特別會員へ集金郵便を以て近々會費をいたゞきにあがりますからお留守でもわかりますようお願ひいたします。

★故松崎克已君の墓碑は既に着々準備中醵金者芳名は近々本誌上へ掲載致します。

★統計報告書は一まとめにして D-ro Dietterle 氏へ二月下旬發送しました。まだお送りない地方會は至急お送り下さい。第二回締切は三月末日。

LA REVUO ORIENTA

★ JARO VIII, N-RO 3 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ MARTO, 1927 ★

専門語彙に就いて

エスペラント學士院專門語部長 ROLLET DE L'ISLE.

之は私が同志數名と協力して化學藥學語彙を集め初めたことをかいた手紙に對する私への返事で私信ですが、エス專門語彙の選擇集成上の注意及昨年八月號の本誌記事"Pseŭdointernacia"に關しての意見をよせられたので御參考になることと思ひ私的の部分を省略して掲載しました。——岡本。

……貴君が今御計畫中の專門學術語彙の問題に關して一言愚見を申上ます。この語彙集成に際してあれやこれやの分科(fako)へ手をひろげてそれらに屬する個々の術語を少しづゝひろひ集めるといふ事は無用の事であつて唯まぢめな組織だつた繼續的な(grava, metoda kaj kontinua)研究のみが有効な結果を齎すものである事を御忘れなきようお願ひいたします。又多分お手ぬかりはないと思ひますが今の御計畫を實行されるに當つて前もつて藥學及化學に關する著作を蒐集されたことと思ひます。卽ち Rousseau 氏の"Vademecum"や戰前にでた"Scienca Gazeto"に發表された化學命名法及化學語彙等の蒐集です。植物學については我々の學士院の專門語彙部の組織に從つて和蘭の B.art de la Faille 氏が既にその方面の辭書をつくる仕事にとりかゝつてゐます。ですからもしその方面に關した事は同氏と連絡をとられるとよいと考へます。尙又藥學に關しての意見を必要とせらるゝならば Rousseau 氏へ御照會になつたらよいと思ひます。(譯者註——以上は主として小生等數名で化學藥學の語彙を集成してゐる者に對しての konsiloj でありますが之は獨り化學藥學に關するのみでなく一般の專門術語の集成事業に對する konsilo として最も適切であると思ふ。特に同氏が kontinua metoda であれといつたこと，あちこち食ひあらすのでなくまぢめに一つの事をやれといつた處，從來發表された材料は valora, senvalora に拘らず一應全部聚集して研究すべき等についてのべてゐるのは大變有益と思ふ。而して我々日本の同志も單に普通語の研究のみならず今後は進んで夫々の專門方面の語彙の研究に努力せねばならぬと思ふ。)

猶問題にかはりますが貴 Revuo Orienta 誌中の二三の論文が日本語でかゝれてゐるので讀む事ができないのが大變殘念です。殊に最近の號の(昨年八月號195頁——此手紙は昨年10月2日同氏が巴里から差出した手紙です)"Pseŭdointernacia"といふ標題の論文に於て一層その感が深かつたのです。といふのは此の標題が大變專門語彙問題にとつて興味が深いからです。………(中略)

扨"Pseŭdointernacia"といふのは——その論文中の數語から推察して貴君はエスペラントの規則に從つて誘導した語と internacia な語との間の差違(例へば規則的につくつた reflektilo と internacia な reflektoro)を論じてゐるのだと思ひます。私の想像では貴君の御意見は一層 internacia な語形を導入することによつてこれらの語形をしらない一般民衆にとつてエスペラント語を一層六ケ敷いものにするといふのだと思ひます。(譯者註——此論文について私から同氏へは何も書きおくつたのではありません。單に偶然同氏はあの日本語の論文をみてその中のエス語だけをひろいよみして想像してをられるのです。多少當方の所見とちがつてゐますが大體想像があたつてゐます。)

私は規則的に合成された語彙が使用されることを實にのぞましいことであると考へます併しこの事は長い間の使用とエスペラントの普及の後におこりうる事だと考へます。その時が來る迄は我々は大抵の科學者にとつて通用するこの二つの語形のどちらでも勝手につかつたらよいと思ひます。

そして他國人卽ち例へば日本のエスペランチストと文通する際には規則的な語形を用ひてよいと思ひます。印刷物に於ては internacia な語の外に規則的な語を括弧に入れるか脚註として書き加へておくとよいと思ひます。〔以下略〕(譯者註——同氏の internacia といふ語は卽ち文法第15條にいふ internacia vorto の事です。)

海外報道

波蘭通信

最近、波蘭の首府ワルシヤワに Esperanto-Press と云ふのが出來た。定期的にエス文で波蘭に於る政治經濟文化生活を叙述し各國に配布して居る。目的は波蘭の社會狀態を各國に知らせると共にエスペランチストの新聞雜誌記者に種を提供するにある。希望によつてはその記事を飾るための各種寫眞も提供しやうと云ふ。しかも會費はビター文も要らぬ。たゞ飜譯して掲載した新聞雜誌の切拔きを二部づつ送つて欲しいと云ふだけだ。文筆に携はる諸君の利用を待つて居る。宛名は "Esperanto-Press", Warszawa, Strato Piekna 11-a, ĉe Prof. Kronenberg, Polujo 第一號には「波蘭便り」と稱する此國の社會狀態を記したものと、Tekla Essigman 夫人の筆になる大音樂家ショパンに關する論文のエス譯がある。新聞雜誌記者諸君の利用すべきものだ。

英國文部省

は例年通り各都市にある成人教育の夜學校に於るエスペラント教授に對し本年も補助金を與へた。これ等のエス語教授は寺小屋式な所謂講習會ではなく、普通の學問なみに公式に取扱はれて居るのだ。この種のエス語教授は現に倫敦市だけでも市會の主催と勞働者教育協會の主催とを併せて十五ある。

國令によるエス語試驗

一昨年四月三十日に墺太利の文部省が國令を發して公式のエスペラント試驗委員を組職してより毎年十月か十一月を期してエス語の公式試驗が行はれて居る。第三回は昨年の十一月十日施行され、多くの志願者中13人(内12名は教師1名は外國人)だけ優秀な成績でエス語を教へる資格をとり、5人はエス語熟達の免狀を貰つた。倫敦に於てもやがて同市商業會議所のエス語試驗が行はれる豫定。

商業科にエスペラント

日本でも横濱の商業會議所は佐々城佑氏を聘してエス語の講習中と聞くが、ユーゴースラヴィアの首府ザグレブ(Zagreb)市に於ても同市の大學商科にエス語講座を設けた事は既報の通りである。それに倣つてか同市の商業學校 "Merkur" に於ても昨年より本年度にかけての商業課目中に必修課目としてエス語を採用した。なほ西班牙に於てもヴアレンチア(Valencia)市商業會議所の監督の下に同市大學の外國語課目中にエス語を加へた。

實用化したエスペラント

芬蘭鐵道では二人の代表者を歐洲各國におくつて各地の運輸狀態を仔細に研究さしたがこの二人の廻つた地域は全行程一萬キロメートル、15ヶ國25の都市を訪れた。これに際して此の二人の用ひた唯一の外國語はエス語であつて立派に用を辯じたと云ふ。

警官とエスペラント

獨逸聯邦のプロシヤ內務省に於てはかねてエス語の實用性に就き調査中であつたが、昨年九月十六日付の指令をもつていよいよ或る外國語或はエスペラントを充分に話せる警官に對しては、勤務中一定の徽章を佩用せしめて一見他の警官と區別し易い樣にする事になつた。歐洲の如く絕えずバベルの塔に苦しめられる地にあつては尤もな事である。

白耳義のアントワープにあつては已に6年以前卽ち1921年以來警官にエス語を敎授して居るが、1925年からは警官敎習所に於て定期的な敎授を續けて居る。現に同市の警官にして充分にエス語を操れるものは60名の餘に上つて居る。

禁酒聯盟國際會議

昨年十月二十五日佛蘭西首都巴里で開催された鐵道從業員禁酒協會聯盟の國際會議に際して次の如き決議が滿場一致で決せられた。「惟ふに國際會議の重大なる役割は相互了解にあり、又各國協會は大會代表者の人選に際し大會に使用さるゝ言語に堪能なる士を選出するに苦しむ實狀にあり、依つて、共通なる補助語の利益をもたらす事大なるに鑑み、本大會は大會役員が次期大會迄に此問題につき調査せられむ事を希望す」と。因にこの大會に列席した芬蘭鐵道從業員の代表者はエス語以外の外國語を話せなかつたと云ふ。

出版されんとするエス文献

美しい自然の山川は誰が造つたものであらうか、いやこの地球はあの月はあの太陽は誰が造り出したものであらうか、如何にして出來上つたものであらうか、吾々の子供らしい空想は年と共に事實の眞理を究明せんとする欲求に燃えて行く。そしてこの欲求は近代人のみの持つものではない、數千年來人類は凡ゆる想像と凡ゆる智囊を盡してこの欲求に對

して夫々の解決を與へて來たのであつた。昨年佛蘭西ローザンヌ(Lausanne)大學の敎授ルイ・メイラアル(Louis Maillard)は'Les cosmogonies anciennes. Les cosmogonies modernes"(古代に於る宇宙創造論と近代に於る宇宙創造論)なる大判500頁版畫83枚寫眞版44枚の一篇を著し、古代印度バビロンに行はれた宇宙論の紹介からコペルニクス、ケプラア、デカルト、ニユートン、カント等の宇宙論を紹介し下つてはアインシユタインの理論にまで及んで居る宇宙創造論史を著述した。惜むらくは原文佛語であつて折角の著述も吾々にとつて緣遠い衆生である。所が同 Maillard 敎授はこれのエス譯を出版せんとする意志もあるので、若し多くのエスペランチストが贊同してくれれば決行しやうとして居る相である。我國の同志でもつてかゝる名著が我がエス文献を飾るのを望む方々は一枚の葉書を惜まずに贊同の意を表して欲しい宛名は U.E.A. (Universala Esperanto-Asocio) 12, Boulevard du Théâtre, Geneve, Svisujo.

たゆまず努力をしやう

一月號に報道した如く印度の詩聖タゴール翁は「エスペラントは時と共に生ける文學を生むに足るべき豐富さにまで進歩するであらう」と折紙をつけてくれた。吾々同志はタゴールの折紙を待つまでもなく確信して居る、エスペラントが遂に勝利を得る日を。さればこそ日々の努力を續けて居るのだ。我々が敢て努力する迄もなくやがては確にエスペラントが勝利を得る日が來る、何も大騷ぎして宣傳する迄もないと手を拱いて居るものは現在にあつては本當のエスペランチストでない。そして個人の努力がどれだけの結果をもたらすか、次の實例が示してくれる。

波蘭クラカウ(Kraków)の大學敎授Odo Bujwid 博士は人も知る努力倦む事を知らない吾々の同志である。昨年末ワルシヤワに於てこれも古い同志の Wilh. Robin 博士の提唱の下にワルシヤワに於る醫師を集め本年五月末同市に開かれる軍醫藥者國際會議の準備會を兼ねてエス語の宣傳を計つたのである。集つた醫師80數名、Robin, Bujwid 博士等の演說が効を奏し、來る大會には公用語としてエス語を採用するべき運びになつた。所でこれだけで得心出來ない Bujwid 博士は遙々クラカウ市から出て來たからにはと早速ワルシヤワ市の名士訪問を始め、先づ大統領を訪うて納得せしめ次は總理大臣次官、文部大臣、陸軍次官と次ぎ次ぎに足を運んで大効果を現した。先づ第一の結果は本年一月一日よりは波蘭の全飛行士はエス語を習ふ事になり各飛行學校では一齊にエス語を公式に敎授する事になつた。次は陸軍の衞生局長を說いて軍醫は全部エス語に關心さす樣特令を出して貰ふ事を約し、第三は今までエス語を毛嫌ひして居たワルシヤワ放送局に放送をさせる事にきまつた。日本ではまだまだ喰はず嫌や毛嫌ひが多い、と云ふ事はまだまだ吾々のなすべき仕事が殘つて居る。深く宣傳方法を考へ吾々はたゆまず努力しなければならない。

萬國の勞働者

一致せよ、しかしそれにはエス語がなければならぬ、と佛のランテイー氏はその著書に書いて居る。今この目的で設立されたのが露西亞の「國際勞働者通信」(Internacia laborista Korespondado 略して "Labintkor")である。この Labintkor には現に金屬工、郵便電信夫、鐵道從業員、赤衞軍等の各部にわかれて居り同地方の月刊週刊の新聞と連絡をとり、各國の勞働組合その他各種勞働團體と通信をかはさうと云ふのだ。それにはどうしてもエス語を用いなければならないので各國の同志がその橋渡しとして通譯の勞を執り實際に Labintkor と各國各種勞働團體とを連結してくれる樣にと希望して居る。

バハイ教とエス語

國際愛の宗敎たる Bahai-movado が、その根本原則十二ケ條の中に『國際共通語の採用』を、既に80年來明記してゐることは有名な事實である。それで Bahaistaro の中には、Esperantisto が非常に多い。またその各種の機關誌にも Esp. が實用せられてゐる。

Le Messager Bahai de Genève は瑞西ジユネーヴなるバハイ國際中央事務局の機關誌であるが、英獨佛語と Esp. 語を併用し、ドイツにある Esperanto Komitato de la Bahai Movado からは、年四回の Esp. 語のみの雜誌 La Nova Tago が出てゐる。またアメリカから出てゐる Star of the West (Stelo de la Okcidento)は英語のみの月刊雜誌ではあるが、是迄度々 Esp. を使用してゐる。昨年の10月號の如きは、Esp. と Bahai-Movado との關係や、嘗て來朝した Root 女史の『Esp. を學んだ動機』また多年東京にて Bahai-Movado のため盡力せし F-ino A. B. Alexander の『日本に於ける Esp. 運動』その他二篇と、全頁を擧げて Esp. のために提供してゐる。(此項 S. Aibara)

內地報道

國際聯盟協會のエス語使用

Esp. 運動に對して、常に好意を有する日本國際聯盟協會兒童部では、三月三日の桃の節旬と五月五日の菖蒲の節旬を期して、世界の兒童に贈る日本の少年少女の宣言文を募集中である。此の事新聞紙上に報ぜらるゝや、東京其他各地の多數同志は『譯文を Esp. 語にせよ』と進言した結果、國際聯盟協會は、その『世界と我等』二月號に於て、アングロサクソン系の國に對しては、英語を使用し、歐洲諸國に對しては Esp. 語及佛語を使用する方針であると發表した。尙同兒童部發案の國際敎育いろは歌留多試考の『え』の項には『エスペラントは共通語』がある。(S. Aibara 氏報)

東京國際倶樂部へも

十數に上る國籍に屬する人々から成立する東京國際倶樂部では、その例會毎に、お定まりの言語問題に惱まされた結果、去る1月30日の例會席上、司會者木下乙市氏(中外商業新報記者)は『Esp. を國際語とし、今後數年の中には、Esp. を此の倶樂部の公用語としたい。就ては今後の例會に於ては Esp. の使用を奬勵する』といふ意味の挨拶を述べた。

當日の講演者の中には上京中の九大教授藤澤親雄氏あり、同氏は、その日本語の講演後 Esp. 語で『本倶樂部には Esp. 語の必要なる』ことを力説せられた。是に對して白髯の老ドイツ人が立つて『カイゼルはドイツ語の發展を計つたが、國際語は何といつても英語だ』と云つたのは哀れであつた。(同氏報)

東京 ★日本エス學會理事會 1月27日開催。詳しくは表紙裏に。★1月29日晩 Eskulapida Klubo の月例會あり。帝大內好仁會食堂にて。西、望月、長澤諸教授、板倉、鷲見博士及慶應日本醫大の學生助手等多く30餘名の盛大さであつた。西、望月兩博士の講演あり。★慶應エスペラント會は三田にあり慶應醫學部エスペラント會は四谷にあつて、共に活動してゐるが、去る2月5日夕、此の兩部會の懇親晩餐會が三田のスターで開れた。四谷からは望月、川上、鷲見の三博士、三田からは園教授の出席あり、先輩及び塾生等20數名の出席者は、雪の夜を暖かく談笑した。今後每學期に一度づつ懇親會を開く由。

大阪 ★大阪中央電信局員中の同志は協議の上每週二回會合することとした。1月12日晩第一回會合を催した。出席4名(事務上全員の集合不可能)。講習研究會話をなす。(山中氏報)

★日本エス學會大阪支部の每週の火曜會は本年から京町堀ビル三階(停留所すぐ)で18—21時まで Fundamenta Krestomatio の研究をしてゐる。

橫須賀 1月4日大橋氏方で會合を開いた。恰も歸省中の白河中學の小野敎諭や最近同志になられた淸水海軍少佐(淸水勝雄氏令弟)も來會された。松葉氏司會の下に本年度のエス運動に關する討議をした。終つて會場を支那料理店イチノセに移し夜の更くるもしらず愉快に談笑した。

金澤 內田敎諭を gvidanto に戴く金澤一中エス會の淸水順吉君(三年生)は去る1月26日の同校の辯論大會に於て"Homo havas buŝon"と題してエス語演說をした。同君はエス語を學び始めてから未だ一年餘りにしかならないのに自作の原稿で堂々と熱辯をふるつたのは全く注目すべき事であり賞嘆すべき事である。(伊藤氏報)

神戶 平野神田町 505豐榮堂書店主眞下啓一氏は最近エス語研究を初められ今回エス書取次販賣を初められた。★2月4日から神戶消費組合熊內支部で女子エス講習を開く、週二回三ケ月間。

龜岡 昨年12月23日より1月3日迄鳥取縣由良町遠藤銳郎氏方で短期講習會開催。龜岡のエス普及會より山田二郎氏出張 gvidi せり。育英中學生徒其他30名。同町へ支部を設置した。

青森 青森エス會では 1月10日より昨年の如く、月水二回會合。月曜は Ĝemo de Unu Soleca Animo をよみ、水曜は Karlo をよむ。★五所川原エス會は每月7の日に圖書館に集合して勉强してゐる。

長崎 古い同志たる、長崎醫大の古屋野敎授、附屬藥專の高島敎授の歐米硏學の旅から歸られた御土產話を伺ふため 1月16日倶樂部で晩餐會を開催。出席者30名。hejmo にガスのゴム管を引廻してすき燒をつゝく。高原氏の兩氏歡迎の辭あり續いて兩敎授の回憶談や旅行談があつた。尙淺田博士は來る五月夫人同伴綠の旅に上られる筈。此會に出席の飯田孃はやつと十歲のお孃ちやんで高原氏の秘藏弟子である。〔寫眞參照〕★九州聯盟幹事江口廉氏2月6日夫人令孃同伴來



長崎での晩餐會
【寫眞說明】 古屋野、高畠兩敎授の歡迎をかねて會合す。(記事參照)。
1. 淺田敎授 2. 古屋野敎授 3. 高畠敎授 4. 高原憲氏 6. 谷口稅關監視部長 7. 松浦稅關海事部長 8. 靑木敎授(長崎高商) 9. 浦田種一氏(三菱造船) 10. 飯田八重子孃。

崎同志多數と會食す。翌日佐世保へ出發された。★Sinjorina Kurso は 1月31日終了。當夜、講師植田敎授のエス演說其他あり。★高原憲氏海事部での講習を gvidi さる。部長松浦氏外10名出席。

京城 1920年創立された、朝鮮エス協會(Korea Esperanto-Asocio) は講習會を常設して金(億)、辛、張(錫)、白の諸氏之を gvidi されてゐるが現在の委員は次の諸氏であると。(宣傳部) 白南奎、洪命憙、任昌淳、姜邁、金鎭浩、李一、(編輯部) 張錫台、金惠朱、金億、金翼軫、(社交部) 朴憲永、辛鳳祚、卞榮魯、(庶務部) 崔善益、崔元直、張世宗、李承根の諸氏。

新聞雜誌とエス語

★農藝新聞(12月15日及1月1日)——國際語と國語擁護——山田弘氏。
★法律經濟新報(1月18日) ——法律學に於ける國際語——堀眞道氏。
★文藝新報(1月1日)——エスペラントと私——秋田雨雀氏。
★無線之硏究(一月號)——表紙及 p. 33 にエス語あり p.57 には Radio kaj Esperanto としてラヂオ用語の英エス對照表あり。

九州エスペランチスト聯盟懇談會 4月10日於福岡。委細は本誌廣告第2頁
日本エスペラント學會久留米支部移轉 久留米市櫛原町1丁目速水眞曹氏方へ
日本エスペラント學會仙臺支部移轉 仙臺市鐵砲町153 宮城園方へ移轉

★ 東京朝日新聞社の計畫部長たる土岐善麿氏は來る四月洋行せらるゝに際し大いに活用する意味でエスペラント語會話を由里氏等の指導をうけて御硏究の由。同氏は歌人として Romazisto として有名な人。その中に東朝社でエス講習が開かれる樣になろう。

噫虎渡乙松氏

函館エスペラント學會々長故虎渡乙松氏の御逝去を御通知致しますのは誠に殘念至極であります。顧みれば故虎渡氏は明治三十九年より「エスペラント」の硏究を致されましたのでありますから明治三十八年に始めて我國に傳はりました翌年なので、我國同志の先覺者であります。爾來昨年十二月に至る迄自身の御硏究は固より函館に於ける會員の指導には頗る熱心にして、剩へ我函館學會には事務所を提供せられ、我學會は今日迄講習會を開催すること八回、講習生實に貳百名に達す、臥牛山腹四階樓上に綠星旗の飜々たる實に我學會の誇りにして同時に又故虎渡氏の熱誠を表彰するものであります。

大正十四年春醫學硏究の爲め歐米漫遊の途に登られ、"ゼネバ"の大會には我會の代表として臨席せられ、我會は勿論我國エス界の爲盡されたる功績偉大なるものであります。去年六月歸朝例に依り熱心に我會を指導せられましたが、十二月偶々風邪に犯され同月十五日遂に永眠せらる。哀悼禁ずる能はず玆に簡單乍ら故虎渡氏の略歷を御通知する次第であります。

函館エスペラント學會

エスペラント初步練習課題講義

第　一　課

進藤靜太郎

1. rozo. 2. lilio. 3. dalio. 4. banano. 5. ananaso. 6. oranĝo. 7. tigro. 8. elefanto. 9. forta. 10. granda. 11. dolĉa. 12. frukto. 13. amas. 14. ŝatas. 15. havas.

上の語を「新撰エス和字典」を出して引いて見ましやう。

1. 薔薇の花。 2. 百合。 3. ダリヤ。 4. バナヽ。 5. 鳳梨。 6. 蜜柑。 7. 虎。 8. 象。 9. 力強い。 10. 大きな。 11. 甘い。 12. 果實。 13. 愛す。 14 好く。 15. 持つ。

以上の言葉をいつまでも字引に貯けて置かずに，自分のものにする。そして（又，其の爲に）次の樣な練習を繰返す。

Rozo estas floro.
薔薇の花は花です。

Lilio estas floro.
百合は花です。

Rozo estas bela floro.
薇薔の花は美しい花です。

Lilio estas bela floro.
百合は美しい花です。

Rozo kaj lilio estas floro**j**.
薔薇の花や百合は花です。

上の樣に rozo と lilio と二つのものを指して云ふから，floro を複數にして floroj とせねば釣合がとれぬ。同樣に，

Rozo kaj lilio estas bela**j** floro**j**.
(bela も複數の語尾を必ずつける。)
薔薇や百合は美しい花です。

同樣にして，初めの單語を利用して，

Ananaso estas frukto.
鳳梨は果實です。

Ananaso estas dolĉa frukto.
鳳梨は甘い（うまい）果實です。

Oranĝo estas frukto.
蜜柑は果物です。

Oranĝo estas dolĉa frukto.
蜜柑は甘い果物です。

Tigro estas forta besto.
虎は強い獸物です。

Elefanto estas granda besto.
象は大きな獸物です。

今までは所謂，A＝B の型の文で，

Rozo＝floro,　tigro＝besto

でしたが，次に A→B と働きかけるものと働きかけられるもの（即目的格の語）のある文章を復習しましやう。

Mi amas floro**n**.
私は花を愛します。

Mi ŝatas frukto**n**.
私は果物が好きです。

上の二つの例の如く「愛されるもの」「花」と好むと云ふ動作の目的物「果物」は形の上でも判然と目的格の**しるし** -n をつけることを忘れぬ樣。

更に動作の目的となるものを形容するところの形容語も共に -n を採つて，

Mi amas bela**n** floro**n**.
私は美しい花を愛します。

Mi ŝatas dolĉa**n** frukto**n**.
私は甘い果物が好です。

複數の時にも，

Mi havas rozon kaj lilion. Mi amas bela**jn** floro**jn**.
私は薔薇や百合を持つてゐます。私は美しい花（複）を愛します。

Mi manĝas ananason kaj oranĝon. Mi ŝatas dolĉajn fruktojn.
私は鳳梨や蜜柑を食べます。私は甘い果物が好です。

以上で大體，單純な文例を終ります。以下これに倣つて會話體に練習しましやう。

Ĉu dalio estas floro?
ダリヤは花ですか。

Jes, dalio estas floro.
はい，ダリヤは花です。

Ĉu dalio estas bela floro?
ダリヤは美しい花ですか。

Jes, dalio estas bela floro.
はい，ダリヤは美しい花です。

Ĉu dalio kaj rozo estas belaj floroj?
ダリヤや薔薇は美しい花ですか。

Jes, dalio kaj rozo estas belaj floroj.
然り，ダリヤと薔薇は美しい花である。

Kio estas lilio?
lilio（百合）は何ですか。

Lilio estas floro.
百合は花です。

Kion vi havas?
何を貴方はお持ちですか。

Mi havas belajn rozon kaj dalion.
私は美い薔薇と（美しい）ダリヤを持つてゐます。

Ĉu vi amas belajn florojn?
貴方は美しい花を愛しますか。

Jes, mi amas belajn florojn.
はい，私は美しい花を愛します。

Ĉu vi havas belajn florojn?
貴方は美しい花をお持ちですか。

Jes, mi havas belajn rozon, lilion kaj dalion.
はい，美しい薔薇と百合とダリヤを持つてゐます。

Kion vi manĝas? Ĉu tio estas banano?
何を貴方は食べてゐますか。それはバナナですか。

Mi manĝas frukton, tio ne estas banano, tio estas ananaso.
私は果物を喰べてゐます。それはバナナではありません。それは鳳梨です。

Ĉu vi ŝatas ananason?
貴方は鳳梨がお好きですか。

Jes, mi ŝatas ananason. Ananaso estas dolĉa frukto.
はい，私は鳳梨が好です。鳳梨は甘い果物です。

Ĉu vi ne ŝatas bananon kaj oranĝon?
貴方はバナナや蜜柑はお好ではありませんか。

Jes, mi ŝatas bananon kaj oranĝon. Banano kaj oranĝo estas dolĉaj fruktoj.
はい，私はバナナも蜜柑も好です。バナナも蜜柑も甘い果物です。

Ĉu leono estas forta besto?
獅子は强い獸物ですか。

Jes, leono estas forta besto. Loeno manĝas beston.
はい，獅子は强い獸物です。獅子は獸物を食べます。

Ĉu elefanto manĝas beston?
象は獸物を喰いますか。

Ne, elefanto ne manĝas beston.
いゝえ，象は獸物を食べません。

Ĉu tigro estas frukto?
tigro（虎）とは果物か。

Ne, tigro ne estas frukto. Tigro estas forta besto. Tigro manĝas beston.
いゝえ，虎は果物ではありません。虎は强い獸です。虎は獸を喰います。

Ĉu leono kaj tigro estas fortaj bestoj?
獅子も虎も强い獸ですか。

Jes, leono kaj tigro estas fortaj bestoj.
はい，獅子も虎も强い獸です。

以上は小坂先生の「エスペラント捷徑」又は「エスペラント講習用書」の第三課までの智識で上に掲げた十五の單語をあやつつた例の一部です。まだまだ出來ますから讀者は自らやつて下さい。外國語とは違つて，エスペラントには斯樣してはいけぬと云ふ法は表現上にはあり樣はずなく，只十六ケ條の文法の精神に従つた語の形式（名詞，形容詞，目的格等云ふ）さへ踏違えなければどんな初步の人が使つても立派なエスペラントです（上手下手はあれ）。「エスペラントは自分の言葉だ英語や佛語の樣な他人の言葉でない」と云ふ氣持と，「自分を世界の人に判らせたい，他の人の云ふ事を了解しよう」と云ふ熱願とを以て，元氣にのびのびとして，眼の前にその文章の光景を描いて底力のある聲をあげて練習なさい。決して語學の教師に憑かれた人の樣にいぢけたり，ためらつたり，卑下する必要はありません。

エスペラント初等講義

第四課　接續詞（一）

Kiam[1] venas printempo, subite la tuta naturo aliiĝas. **Kvankam**[2] ĉe la suproj de l' montoj ankoraŭ restas neĝo, jam vekiĝas nova vivo en arboj kaj herboj. Varmeta suda vento muĝetas super la tero, kiun malvarmo katenis, **dum**[3] la vintro regis la mondon. **Apenaŭ**[4] tiu ĉi varmeta bloveto kune kun la varmaj sunradioj degeligas la glacikovron de riveroj kaj lagoj, denove murmuretas fontoj, muĝetas riveretoj. Komenciĝas la unuaj laboroj surkampaj, **ĉar**[5] estas jam tempo plugi kaj semi. **Se**[6] ni ne semas, **nek**[7] sterkas en printempo, ni ne povos rikolti en aŭtuno. Ĉie floras fruktarboj kaj florherbetoj. Birdoj kantas, **kvazaŭ**[8] ili volus esprimi **ke**[9] la printempo estas multoble pli gaja, **ol**[10] ĉiu el la tri aliaj sezonoj.

Alproksimiĝas la somero **aŭ**[11] la dua sezono de l' jaro. Somere la suno plej alte staras en la ĉielo kaj alsendas al la tero siajn tre ardantajn radiojn, **kaj**[12] varmigas tiom la teron kaj aeron, ke ofte oni timas, **ĉu**[13] ĉiuj kreskaĵoj elvelkiĝus pro varmego. **Sed**[14] ofte malheliĝas la ĉielo kaj subite fulmotondro atakas nin. Falegas pluvego kaj refreŝigas kreskaĵojn kaj malvarmigas la teron kaj la aeron.

Aŭtuno estas la sezono de rikolto. Estas ĝojinde, **ke**[15] en aŭtuno ni povas rikolti la rekompencon por nia dumsomera laboro. Homoj laboras en la grenkampo, kiu ondiĝas **kiel**[16] ora lago. Oni nun la herbejon jam la duan fojon falĉis, sub la sunradio sekigas la herbon kaj poste konservas ĝin, **kiel**[17] fojnon. La aŭtuno estas fama pentristo. **Kiel**[18] pentristo, ĝi kreas sen peniko aŭ sen kolorigilo multekoloran bildon—belan pejzaĝon. La tagoj pli kaj pli mallongiĝas, **dum**[19] la noktoj pli kaj pli longiĝas. La hirundoj forlasas nin kaj transloĝiĝas en plivarmaj sudaj landoj, **ĝis**[20] la varma printempo denove nin vizitos. Baldaŭ venos vintro malvarmega. **Tial**[21] homoj preparas sian loĝejon por la malvarma sezono.

Vintro venas. Dense, pli dense falas la neĝo kaj kovras la teron. En la neĝa kampo infanoj interbatalas per neĝbuloj **aŭ**[22] faras neĝpupojn. Iuj glitkuras per glitŝuoj, aliaj per skioj. Ja, la vintra sporto hardas la korpojn de l' homoj **kiel**[23] feron.

【譯文】 春がやつてくると[1]（時）自然界はたちまち一變します。山の頂には猶雪が殘つてはゐるが[2] 既に草木の內部には新しい生活が目覺めてゐます。暖い南風が地面の上をふきます――冬が世界を支配してゐる間[3] 寒さにとぢこめられてゐたあの地上を。此の生ぬるい風が暖い日光と共に川や湖の氷の覆ひをとかすやいなや[4] 再び泉はさゝやき、小川は音をたてゝ流れます。野良での最初の仕事が初まります――既に耕したり種を播いたりすべき時期がきたのだから[5]。若し[6] 我々は春に於て種をまかず肥料も[7] やらない[7] ならば[6] 秋にはとり入れをすることができないのだ。到る處果樹も花さき草花もさいてゐる。鳥は恰も[8] 春は殘の三つの季節（夏、秋、冬）のどれより[10] かも幾層倍も陽氣であるといふことを[9] 云ひたげ[8] に歌つてゐる。

夏即ち[11] 第二の季節が近づいてくる。夏には太陽は空のもつとも高い所にあつて地上へ灼けつくような光をなげてゐるそして[12] 地面や空氣を大變熱するので時には植物が皆暑さのため枯

れてしまひはせないか[13]と心配する程である。併し[14]時々空がくもつて俄かに雷鳴がおそつてくる。大雨が降りだして植物の生氣をとりもどし地面や空氣を冷やかにする。

秋は收獲の時期である。自分自身の夏の間の勤勞に對する報酬を秋に於て獲るといふことは[15]うれしいことである。人々は黄金の湖の如く[16]波うつてゐる稻田の中で働く。今草原の二度目の刈取りをすませて太陽でその草を乾燥しやがてそれを秣(ｸﾞｻ)として[17]貯へるのである。秋は立派な畫家だ。畫家として[18]秋は繪筆ももたず繪具ももたず極彩色の繪――美景をつくりだすのである。晝は益々短くなる一方[19]夜は益々長くなつてゆく。燕は我々をすてゝずつと暖かい南の國へ暖い春が再びやつてくる迄[20]轉住するのである。やがて寒い冬がくるであらう。故に[21]人々はこの寒い季節に對して住居の準備にとりかゝる。

冬がくる。しきりと雪が降つて世界を蔽ひかくす。子供達は雪の原で雪合戰をしたり或は[22]雪達磨をこしらへたりする。或者はスケートでかけまはり或者はスキーでかけめぐる。實に冬の運動は人の身體を鐵のやうに[23]きたへる。

上のエスペラント文を何回も繰返して諳記する程音讀して下さい。上の一文中には17個の接續詞（本來の接續詞のすべてと轉來の接續詞の一部を一通り殘らずよみこんでありますから之を諳記して各の接續詞の使用法に熟達するならばエスペラント語についての學力が大いに上達致します。接續詞の用法は大分日本語とはちがつてゐますからよく注意せねばなりません。例へば ke, kvankam, se 等はどうしてもその後へくる文の頭に冠らせられて他の文に接續する役目をなしてゐますからどうしても日本語の樣に置いては意味をなさなくなります。C estas D, kvankam A estas B と云ふ文を日本語流に A estas B kva kam C estas D とおくと意味があべこべになります。

次の一覽表は接續詞を alfabeto 順に列擧してその譯語をつけたもので譯語の次の( )の中の數字は上のエスペラント文中の接續詞の右肩の數字と同一のものですから上文と對照して御研究下さい。

接續詞一覽表

1. **aŭ**: a) か, 又は (22); b) 卽ち (11)
2. **ĉar**: 何となれば (5)
3. **kaj**: と, 及び (12)
4. **ke**: と云ふ事を (9); と云ふ事は (15)
5. **kvankam**: ではあるが (2)
6. **nek**: も亦……ぬ (7)
7. **ol**: よりも (10)
8. **se**: もし……ならば (6)
9. **sed**: 併し, だが (14)

轉來の接續詞

10. **apenaŭ**: ……するかしないかに, やいなや (4)
11. **ĉu**: かを, かと (13)
12. **dum**: a) の間に (3); b) のに一方は…… (19)
13. **ĝis**: 迄 (20)
14. **kiam**: の時は (1)
15. **kiel**: a) の如く〔主格と同格 (16)〕, 〔目的格と同格 (23)〕; b) として〔主格と同格 (18)〕, 〔目的格と同格 (17)〕。
16. **kvazaŭ**: 恰も……の如く (8)
17. **tial**: 故に (21)

以上の轉來の接續詞は主として他品詞の助辭を接續詞として使用したものであるが尙上述のもの以外にもいくらもある。特に關係詞の如きはすべて接續詞的に用ひられるものであるから上述以外のもので kial, kia kio…… 等すべて接續詞的に用ひらるゝ事多し。

例: Mi ne scias, *kial* li ne ĉeestis.

Ĉu vi scias, *kia* li estas?

尙又接續詞に流用される副詞がある。例へば alie, cetere, dume, nome, plie, sekve 等である。

例: Iru for, *alie* mi vin batos.

Li estas honesta, *dume* lia edzino estas ruza.

尙 antaŭ ol, ĝis kiam 等の句の接續詞や tiel…… kiel, ju…… des 等の呼應接續詞等については別にあらためてのべることとする。

例: *Antaŭ ol* mi venis, ĝi malaperis.

Kiel oni vin taksas, *tiel* oni vin regalas.

人騷がせ

【"ĜOJO" de Anton Ĉehov】

大森志郎

Estis dekdua horo nokte.

Mitja Kuldarov, emociita, kun hirta hararo, alflugis en la loĝejon de siaj gepatroj kaj rapide marŝadis en la ĉambroj. La gepatroj jam kuŝiĝis dormi. La fratino kuŝis en la lito kaj legadis la lastan paĝon de romano. La fratoj-gimnazianoj dormis.

— De kie vi venas? — miris la gepatroj — Kio okazis kun vi?

— Ho, ne demandu! Mi tute ne atendis! Ne, mi tute ne atendis! tio . . . tio eĉ estas nekredebla!

Mitja ridegis kaj sidiĝis en la fotelon, pro ĝojo ne havante plu fortojn stari.

Tio estas nekredebla! Vi ne povas imagi tion al vi! Vidu!

La fratino saltis el la lito kaj, surĵetinte al si la litkovrilon, venis al sia frato. La gimnazianoj vekiĝis.

— Kio okazis al vi? Vi tute perdis vian vizaĝon!

— Tio estas pro ĝojo, panjo! Min ja konas nun la tuta Rusujo! Tuta! Antaŭe nur vi sciis ke en la mondo ekzistas la oficisto Dimitrij Kuldarov, kaj nun la tuta Rusujo scias pri tio! Panjo! Ho, Dio!

夜の十二時。

ミチヤ・クルダローフは大元氣で、髮をも亂して、おやぢの家に飛込んで、部屋部屋を馳廻つた。ふた親はもう床に入つてゐた。妹は、寢床の中で、小説の最後の頁をよんでゐた。中學校の弟達はもう眠つてゐた。

——どこからやつて來たんだ。——ふた親はけゞんさうに訊れた。——一體どうしたといふのだ。

——さうお訊きにならんでもよ。思ひもよらなかつた。さうだ夢にも思はなかつた。こんな……こんな事は考へられない。

ミチヤは笑ひこけて肱掛椅子に腰を下した。あまり嬉しくつて立つた儘ぢやゐられなかつたのだ。

こんな事は考へられない。こんな事はあなた達には考へもつかない。そうら。

妹は床から飛び起きて、上掛けをひつ掛けたまゝで、兄の方へやつて來た、中學生達も目をさました。

——何が起つたんだね。顏色が變つてゐるぢやないか。

——うれしくつて仕方がないんですよ。お母さん。今はもうロシヤ中の人達が私の名を知つてゐるんだ。ロシヤ中の人だ。これ迄はあなた達だけが、デミトリー・クルダローフといふ役人がゐるといふ事を知つてゐたのに、それが今ぢやロシヤ中の人が知つてゐるんだ。ね、お母さん。さうでせう。

【註】**emoci'i** 感動さす。**hirta** 亂髮の。**har'aro** 髮（**haro** は髮の毛一本をさす）。**al'flugi** 飛んでゆく。**marŝ'adi** 行進す，歩きまはる。**kuŝ'iĝi** 横になる（**kuŝi** 横たはつてゐる）。**leg'adi** よみつゞける。**romano** 小説。**gimnazi'ano** 高等學校生徒。（**gimnazio** は學制が異ふからあてはまらないが大體七年制高等學校（小學校より入學の）位の程度。**kio okazis kun vi** 何がお前におこつたのか（どうしたのか）。**tute ne** 全く … しなかつた。**atendi** 豫期す（待つ意から）。**Ne, mi tute ne atendis** …. Ne の用法に注意。否定文のときneを用ひてゐる。**ne'kred'ebla** 信じられない。**rid'egi** 大笑す。**sid'iĝi** すわる（**sidi** 坐つてゐる）。**fotelo** 肱掛椅子。**ne … plu fortojn stari** 立つてゐる力がもはやこれ以上なく。**imagi** 想像す，思ひうかぶ。**salti el** からとび出す。**sur'ĝeti** ひつかぶる。**lit'kovr'ilo** 床の上かけ。**vek'iĝi** 目覺める（**veki** おこす）。**perdi vizaĝon** 顏色を失ふ。**tuta Rus'ujo** 全ロシヤ國。**ofic'isto** 事務員，官吏。**de'-**

Mitja saltis, kurante vizitis ĉiujn ĉambrojn kaj denove sidiĝis.

Sed kio do okazis? Parolu saĝe!

— Vi vivas simile al la sovaĝaj bestoj, vi ne legas gazetojn, vi ne atentas la okazintaĵojn, kaj en la gazetoj estas multo rimarkinda! Se io okazis, ĝi estas konata, ne povas esti kaŝita. Ho, Dio! En la gazetoj oni ja presas nur pri fame konataj personoj, sed ili nun ankaŭ presis pri mi!

— Jes? Kie?

La patro paliĝis. La patrino ekvidis la sanktan bildon kaj faris krucsignon. La gimnazianoj saltis, kaj, estante nur en la noktĉemizoj. alvenis al sia pliaĝa frato.

— Jes! Estas presita pro mi. Nun tuta Rusujo konas min! Vi, panjo, konservu tiun ĉi numeron por memoro! Iufoje ni tralegados. Rigardu!

Mitja eltiris el sia poŝo numeron de ĵurnalo, donis ĝin al sia patro kaj montris per fingro la lokon, limigita per blua krajono.

— Legu!

La patro metis siajn okulvitrojn.

— Legu do!

La patrino ekvidis la sanktan bildon kaj faris krucsignon. La patro ektusis kaj komencis legi!

“ 29an de Decembro, dekunua horo nokte, la oficisto Dmitrij Kuldarov...

— Ĉu vi vidas? Pluen!

ミチヤは跳上つて、家中の部屋部屋を馳け廻つて來て、また腰を下した。

だが一體何事が起つたのだ。ちやんとお話し。

——お前さん達はけだもの同樣の生活をしてゐる。お前さん達は雜誌をよまない。何が起らうと無頓着だ。だが雜誌には珍らしい事件が澤山書いてある。何か起りや、ちやんとわかる。知れずになんかゐやしない。さうだ。雜誌といふものは極く有名な人の事だけ載せるもんだ。それに今度は僕の事も載せてゐる。

——さうか。どこに。

父親は顏色をかへた。母親は聖母の像をチラと見て十字を切つた。中學生達は跳り上つて寢衣だけの儘で、兄貴の方へ寄つて來た。

——さうさ。僕の事が載せてある。もうロシヤ中の人が僕を知つてゐる。れ、お父さん。記念にこの雜誌をしまつてお置きなさい。いつかすつかり讀みませう。御覽なさい。

ミチヤはポケツトから雜誌を一册引出して父親へ渡し青い鉛筆でしるしのつけてある所を指さした。

——讀んでごらんなさい。

父親は眼鏡をかけた。

——讀んで御覽なさい。さあ。

母親は聖母の像をチラと見て、十字を切つた。父親は咳拂をして、よみ出した。

“十二月二十九日の深更十一時、官吏デミトリ・クルダローフは……

——それれ。次を。

---

nove 更に。**vivi** 生活す。**simile al** に類した, の樣に。**gazeto** 雜誌。**okaz'int'aĵo** 出來事。**rimark'inda** 注意すべき。**fame kon'ata** よく知られた。**pal'iĝi** 靑くなる。**sankta bildo** キリストの像かマリヤの像か不明。後者の事にして譯してをいた。**fari kruc'signo'n** 十字をきる。恐怖の時などにする。(**kruco** 十字架, 十字形。**kruc'umi** 十字架にかける, 磔(ハリツケ)にする。**Kruc'milit'iro** 十字軍[史]。**krucifiks'o** キリスト十字架像)。**nokt'ĉemizo** 寢着のシヤツ。

al'veni つく。**pli'aĝa frato** 年上の兄弟(卽ち兄)(弟は **pli'juna frato** 又は **malpliaĝa frato**)。**numero** (新聞雜誌の何月)號。**por memoro** 記念のため。**tra'legi** 通讀。**ĵurnalo** 新聞雜誌等。**lim'ig'ita** 限界をつけてある。**krajono** 鉛筆。**okul'vitroj** メガネ。**ek'tusi** 咳をする。**plu'e'n** より多く, それ以上, もつと先へ。**bier'ejo** ビヤホール。**en ebria stato** 泥醉狀態で。**detale** 精密に。**pri'skrib'ita** 叙述された, 書きしるされた。**daŭr'igi** 續ける。**sub la ĉevalo'n** 馬の

. . . la oficisto Dmitrij Kuldarov, elirante el la bierejo, kiu estas en la malgranda Brona strato, en la domo de Kozuhin, kaj troviĝante en ebria stato . . .

Tiu estas mi kun Semjon Petroviĉ

. . . . Ĉio estas detale priskribita! Daŭrigu! Pluen! Aŭdu!

. . . kaj troviĝante en ebria stato, falis sub la ĉevalon de staranta tie veturigisto — ano de vilaĝo Durikino, distrikto Joĥnova, Ivan Drotov. La ektimigita ĉevalo transveturis sur la korpon de Kuldarov, trenante glitveturilon, en kiu sidis Stepan Lukov, komercisto el Moskvo. Kuldarov, en la komenco estis en senkonscia stato, kaj estis alportita en la policejon kaj atestita de la kuracisto. La frapo, ricevita sur lia nuko . . .

— Tio estis per la timono, paĉjo. Pluen! Legu pluen!

. . . ricevita sur lia nuko, ne estas danĝera. Pri la okazintaĵo estas farita protokolo. Al la malfeliĉulo estas donita medicina helpo . . .

Oni diris ke mi faru kompresojn kun malvarma akvo. Ĉu vi legis? A? Tio estas! Nur la afero iras tra tuta Rusujo! Dodu tion!

Mitja prenis la gazeton kaj metis ĝin en sian poŝon.

— Mi vizitos Makarov'ojn, al ili mi devas montri . . . Ankaŭ al Ivanickij, Natalija Ivanovna, Anisim Vasilieviĉ . . . Mi iras. Adiaŭ!

Mitja metis la ĉapelon sur sian kapon, kaj triumfante elkuris en la straton.

……官吏デミトリ•クルダローフは、ブローナ小路のビヤホールなるコツヒン宅より出て、泥醉せるまゝに……

私さセミョン•ペトロヴイツチですよ……すつかり詳しく載つてゐます。さあ、もつさ。靜にして。

……泥醉せるまゝに、この所に靜止せる、ヨホノヴア郡ドリキノ村のイヴアン•デロトフの馬の下に轉落せり。馬は喫驚して橇を曳けるまゝクルダローフの頭上を轢き去れり。乘客はモスクワの商人ステフアン•ルーコフなりき。クルダローフは最初は失神狀態にありしが警察署へ運ばれ、醫師の證明を得たり。頸部に受けたる轢傷は……

——橇の轅の爲です。さあもつさ。もつさ讀んで。

……頸部に受けたる轢傷は、重傷にはあらず。この事件は調書を作成され、負傷者には醫師の治療を加へられたり……

冷水で濕布をせにやならんさうです。お讀みになりましたか。え。こういふ事です。もうこの事はロシヤ中に知れ亘つてゐる。返して下さい。

ミチヤは雜誌を取つて、ポケツトへ押込んだ。

——マカロフの家を訪ねよう。あの家の人にも見せねばならん……それからイヴアニツキーも、ナタリヤ•イヴアノヴナも、アニシム•ヴアシリエヴイツチも……歸りますよ、さよなら。

ミチヤは頭へ帽子を載つけて得々さして街へ飛出した。

下へ(方向)。**star'anta tie vetur'ig'isto** そこに立つてゐた馭者。**veturigisto=ano de vilaĝo Durikino, distrikt J.=Ivan Drotov** 三つが同格です。**ek'tim'ig'ita** びつくりさゝれた。**trans'veturi sur la korpon** 身體の上をこえて馬車がひかれてゆく。**tren'ante** 曳きながら。**glit'vetur'ilo** 橇(ソリ)。**komerc'isto** 商人。**Moskvo** モスコー市。**en la komenco** 初めは。**sen'konscia** 無意識の。**al'port'ita** はこばれた。**polic'ejo** 警察署 (**polico** 警察。**polic'ano** 巡査)。**atest'ita** 證明さる。**ricev'ita** うけた。**nuko** 頸(ウナジ)(くびは **kolo**)。**timono** 轅(ナガエ), 梶棒。**pa'ĉjo** お父さん。**danĝera** 危險な。**protokolo** 調書。**medicina helpo** 醫學のたすけ。**kompreso** 罨法。**triumf'ante** 凱歌を奏して, 意氣揚々さ。**el'kuri en la straton** 街へ駈出てゆく。(**enkuri en —n** は ——へかけこむ。**Makarov'ojn** マカロフ家の人々。**Mi vizitos M. Ankaŭ al Ivanickij** … は此自分の名が新聞にでたのを吹聽にゆくために之等の人々を訪問するつもりなのである。

新聞のエス語

森　露　夫

ロンドン九日發——英國上院における支那問題の討議に際し樞密院議長バルフォーア伯は政府を代表して「英國政府は既に國際聯盟に支那の形勢を通告し英國の對支政策は聯盟規約の條文および精神に全然一致したものである」と聲明した。

上院は la Supera Domo (又は Ĉambro) と云ふ。英國の上院は the House of Lords と云ふから la Domo de Lordoj がよかろう我國のは貴族院だから la Domo de Nobeloj でよろしからん。討議は diskuto 又は debato. 樞密院 (Ŝtata) Konsilantaro. 國際聯盟は la Ligo de Nacioj.

Londono, Februaro 9 Ĉe la Domo de Lordoj, ĉe la debato pri Hinujo, Grafo Balfour, Lordo-Prezidanto de la Konsilantaro, reprezentante la Registaron proklamis ke la Brita Registaro sendis komunikaĵon pri la situacioj de Ĥinujo al la Ligo de Nacioj kaj la Brita Politiko estas tute komforma al la principo kaj sprito de l' kontrakto de la Ligo.

フイラデルフイア九日發——デトロイト、タイガーズ軍の老功者でさきのシーズンの終りに隱退したタイ、カッブは今度フイラデルフイヤアスレチック軍の間に一年間の契約を結んだ。右契約によつて彼のうける年俸は六萬五千弗なりと。

古つはもの、老練家の意味には veterano と云ふ語がある。

Philadelphia, Feb. 9—Ty Cobb, veterano de Detroit Tigers, kiu eksiĝis ĉe la fino de l'lasta sezono, faris unujaran kontrakton kun Philadelphia Athletics. Unujara salajro, kiun li ricevas laŭ la kontrakto, estas $ 65,000

北京九日發——總稅務司令官フランシスアグレン卿は猶共官邸に滯在し北京外交團に於て承認せざる限り支那政府の免職命令には屈從できないと云つてゐる。

Peking, Feb. 9— Siro Francis Aglen, la eksinspektoro-generalo de la impesta oficejo, ankoraŭ restas en sia ofica loĝejo kaj deklaras ke li ne povas obei la eksigan ordonon de l' registaro de Ĥinujo ĝis la Diplomataro en Peking akceptos ĝin.

昨今北日本郎ち北陸信越地方をおそつてゐる降雪は數十年來ない大雪でしかも猶未だ止まずに降つてゐる。雪の高さは數米に達しあたり一面は雪の外何物もない。町も森も山も一面に雪におほはれてゐる——もつと適切にいへばこれらはすつかり雪の海の中にかくされてゐるのだ。到る處で人家が雪の重みで倒壞し人の死傷が多い。人々は屋根の雪をはきおとしてゐるが果しもなく雪はふりそゝいでゐる。方々で列車が澤山の乘客をのせたまゝ立往生をしてゐる。

La neĝado, kiu nun vizitas la nordan parton de Japanujo, t. e. Hokuriku kaj Ŝin'ecu, kaj kiu estas la plej densa en la lastaj kelkdek jaroj, ankoraŭ ne ĉesas kaj la neĝo jam havas altecon de 5–6 metroj. Nenio ekzistas en la mondo krom neĝo. Urboj, arbaroj kaj montoj estas tute kovritaj de neĝo, aŭ por diri pli ĝuste, tute kaŝitaj sub la maro de neĝo. Ĉie okazas detruiĝo kaj disrompiĝo de loĝejoj pro la pezeco de l' neĝo kaj mortiĝo kaj vundiĝo de loĝantoj. Ĉiuj forbalaas neĝon sur la tegmento de sia domo sed senfine falas neĝo. En kelkaj lokoj vagonaroj haltas en la neĝa kampo kun multe da pasaĝeroj.

會話のエス語

停車場にて【ĉe Stacio】

植田高三

Kie estas la biletvendejo por la Tokaido-linio?	東海道線の切符賣場はどこかね。
Tie ĉe la kvina giĉeto.	そこの五番目の窓です。
Nagoja, 2-a klaso, irorevena.	名古屋行二等往復を下さい。
Tri unua-klasaj biletoj por Kobe.	神戸行一等切符を三枚下さい。
Cu mi bezonas pagi por la ekspresa bileto?	急行券を買はればなりませんか。
Kiom kostas la veturpago al Kobe?	神戸までいくらですか。
Ĉu infanoj povas ricevi rabaton de 50-procentoj?	子供は五割引(50%)にしてもらへるのですか。
Jes, sinjoro. Kaj infanoj pli junaj ol kvarjaraj estas senpage transportataj.	そうです。そして四歳以下の子供さんは無料です。
Mi volas ekspedi mian pakaĵon.	荷物をおくりたいですが。
Kion do mi devas fari?	どうしたらよいでせう。
Iru tien al la pakaĵejo kaj montru vian bileton kaj registrigu vian pakaĵon kaj ricevu la ricevateston.	あそこの荷物預所へお出でなさいそしてあなたの切符をみせて荷物を預けて(registr'igi 帳簿へ登錄さす)受取證をもらひなさい。
Portisto, alportu tiun ĉi kofron al mia vagono, la tria dormovagono de la duaklasa ekspreso je la 22-a horo.	赤帽このトランクを私の車室へ運んでくれ22時發(午後10時)の二等急行の三番目の寢臺車だ。
Eniru! La vagonaro tuj foriros.	お這り下さい。すぐ發車致します。
Tiu ĉi vagono estas plenplena de pasaĝeroj, kaj jam restas nenia sidloko.	此の車室は乘客で滿員だ,もう座席(sid'loko)が少しもない。
Ni transiru en alian vagonon.	外の車室へ移ろうぢやないか。
Ĉu tiu ĉi vagonaro iras rekte al Osaka?	この列車は大阪へ直行しますか。
Ĉu mi devas ŝanĝi la vagonaron en iu stacio?	どつかで乘換へればなりませんか。
Jes, ŝanĝu la vagonaron ĉe Nagoja Stacio.	そうです。名古屋驛で乘換なさい。
Metu la valizon en la reton!	鞄は網棚へおのせなさい。
Ĉu manĝovagonon havas tiu ĉi vagonaro?	食堂車は此列車にあるかね。
La lokomotivo fajfas. Jen ni eniras en tunelon.	汽罐車が汽笛をならします。今トンネルへ入ります。
En kiu stacio nun ni haltas?	今何といふ驛にとまつてゐるのですか。
Tiu ĉi estas Ŝizuoka Stacio.	靜岡驛です。
Kiom da minutoj ni haltas tie ĉi?	何分間こゝで停車しますか。
Dek minutojn.	十分間です。

趣味のエス語

福富義雄

Lorelej'

1. Ne scias mi, kial mi estas
Malgaja en la kor'.
Antikva fabelo restas
Por ĉiam en mia memor'.
Vespero jam ekmalheliĝas,
Fluadas la Rejn' en trankvil',
La supro de l' monto lumiĝas
En vespersuna bril'.

2. Belega knabino jen tronas
Kun ora juvelar',
La belan vizaĝon kronas
Mirinde la ora harar'.
Si uzas la oran kombilon
Kaj dume kantas ŝi,
Sed havas strangan stilon
Sorĉigan la melodi'.

3. Kaj sopiregon eksentas
Sipisto dum sia vetur';
Rifaron li ne priatentas
Rigardas ja alten li nur.
Mi kredas, ke dronos do fine
Sipisto kun sia boat',
Kaj tion kaŭzis feine
La Loreleja kantad'.

【ローレライ】

1. いはれ知らねども
心わびし
古き物語
そゞろ偲ばれつ。
空寒くうすれ
しづけきライン
入日に映ゆる
峰のいたゞき。

2. 彼方の巖に
艶(アテ)なる乙女
黄金のよそほひ
みる目もあやに
くしけづり美ふ
美しの歌
いみじき力は
歌にあふれつ。

3. 過ぎ行く舟人
心よひて
うつつにまよひつ
乙女に見入る
舟も舟人も
なごりはうたかた
あはれくしきいみじき
ローレライの歌。

ハイネの詩

此の詩は下の荒野の薔薇と共に知らない人のない程人口に膾炙した歌です。日本譯は廣く歌はれてるのをそのまゝ採りましたから大部分意譯です。

註：**tronas**……黄金の寶石で装い王座に座して居る。**kronas**……金髪が美しい顔の冠になつてる。この様にこの詩は交互に韻をふんであるのに注意。**tion kaŭzis**……その様な事を惹き起したのは奇しくもローレライの歌である。

Rozeto en Herbejo

1. Knab' rozeton vidis li,
Vidis en herbejo;
Estis juna, bela ĝi,
Por ĝin vidi kuris li,
Vidis kun ĝojego.
Roz', rozeto, ruĝa roz',
Rozo en herbejo.

2. Diris knab': "Mi rompos vin,
Rozon en herbejo!"
Diris roz': "Mi pikos vin,
Ĉiam vi memoros min,
Mi ne ĝin permesos."
Roz', rozeto, ruĝa roz',
Rozo en herbejo.

3. Knab' sovaĝa rompis ĝin,
Rozon en herbejo.
Kvankam roz' defendis sin,
En koler' ĝi pikis lin,
Tamen morti devis.
Roz', rozeto, ruĝa roz',
Rozo en herbejo.

【荒野の薔薇】

1. 童は見たり
荒野の薔薇
朝と清く
嬉しや見んと
走り寄りぬ
薔薇薔薇紅き
荒野の薔薇

2. 「我は手折らん
荒野の薔薇」の
「我は得堪へじ
永久(トハ)に偲べと
君をささん」
薔薇薔薇紅き
荒野の薔薇

3. 童は折りぬ
荒野の薔薇
薔薇は刺せど
歎きもあだに
手折られけり
薔薇薔薇紅き
荒野の薔薇

ゲーテの詩

之は第一行目の**knab'**と**li**とは同格。**herb'-ejo**雑草の生ひ茂つた所。二番目の第三句からの日本譯ははつきりしないが「私はお前を刺して永久に自分を忘れぬ様又その様な事は許さないと云ふ事を知らしてやる」の意。

やさしい詩で誰も皆様の御存じのものですから盛んに歌つて下さい。此等は Internacia Kantaro（各國の歌を集めたエス語の歌集）の中にも譜と共に入つて居ます。

決　闘

【泰西エス文藝の渉獵】　平岡　昇

決闘（原名 La Pafo）は A. S. Puŝkin の原作。D-ro A. Fiŝer のエス譯。作者 Puŝkin に就ては冗言を要しない。彼の天才が漸く人生の深所に根を下し將に豐かな實を結ばんとする三十七歳の時不慮の死に數奇な生涯の幕を閉ぢたが、「エヴゲーニイ・オネーギン」「ルスランとリユドミーラ」「吝嗇な騎士」「大尉の娘」などの作者として、初めて露西亞文學に realismo の流を引き入れて近代露文學の祖となつた Puŝkin の散文に於ける傑作の一例。“La Pafo”は groteska な題材を寫實的手法によつて展開せしめ、グロテスクな一種の浪漫的魅力と深刻なる寫實的感銘とを以て迫る作。

露西亞の寂しい小さなXといふ町に駐屯してゐる守備隊付の若い一士官が、自分の周圍にゐる仲間の中の一人の疑問の人物に興味を持ち初めた。その男は仲間の中でたゞ獨り軍人でなかつたが前身は輕騎兵で、何故だか好んで、この陰慘な町に住み込んでゐるのだつた。年の頃三十五六で、むつつりとした風や頑として動かない氣質や意地の惡さうな話し振りが何となく對者に強い印象を與へ、彼の人格は神秘な？に蓋はれてゐた。それに、風貌は露西亞人らしいのに外國名を持ち、暮しは貧乏らしく然も金使は荒く見えた。彼を包む種々な疑問の中に毎日ピストルを射つ習慣があつた。彼の家の壁は蜂の巣の樣に射拔かれ、澤山のピストルの山が粗末な彼の部屋の唯一の飾り物だつた。そして彼の射擊の巧みさは非凡と云ふも尙足りない程であつた。時々談が決闘の事に觸れると氣の無い返事をするだけでむしろそれを避けてゐるらしかつたが士官達は彼の射擊の恐しい程の巧妙さの脊後に隱れた不幸な犧牲を想像して內心彼を畏怖して彼のこの態度を憶病に歸することをしなかつた。

ところがある時、この男（Silvio）の家で開かれた會合で、彼は無理に勸められてトランプの遊びに加はつたことがあつた。その時その中に新しくその町に來た士官がゐたが、酒の機嫌か些細な事からシルヴイーに喰つて掛かつた。シルヴイーは怒りのために頰が蒼ざめ眼が輝いた。一同ははつと思つた。もうその士官の生命は無いものと考へた。が不思議にも翌朝士官達は安全な彼の士官の姿といつもの通り餘念もなく射擊の練習に熱中してゐるシルヴイーとを見出した。それでも士官達は決闘の申出のあることを信じてゐた。が併し事件はその儘煙のやうに消へてしまつた。そして血氣に早る士官達の惡評もいつか消へて又元の無氣味な人物として殘つた。たゞ初めから彼に注意してゐた若い士官だけは不滿を消すことが出來なかつた。浪漫的な空想を通じて現實の人を觀めてみたいこの士官の希望が今までシルヴイーに掛けられてゐたのが一朝にして破れたからである。士官は彼と一番親しかつたに拘らずそれ以來は口も利かなかつた。シルヴイーは何か辯解したい素振も時々みせたが、士官はそれを聞かうともしなかつた。

扨てその後ある日何處からか送られた小包を大急ぎで開いて取り出した一通の書面を眼を輝かして走り讀みすると、突然士官達に呼びかけた。

「諸君、私はある事情で今晩この地を去らればなりません。おなごりとして晝食を私の宅で取つて頂きたい。」とかう云つて、今度は彼の若い士官の方を向いて、「君も是非來て頂きたい。」と云つた。

やがてその晝食が終つて皆が立去ると、シルヴイーは士官を獨り引き止めて「一寸話があるから」と云つて掛けさした。二人はきせるをくはへたまゝ向ひ合つた。濃い煙草の煙の中に輝く眼と悲痛な蒼白の顏がさながら惡魔の樣な感じを與へた。やがておもむろに彼は口を切つた。彼の話に依ると、彼が士官との決闘を避けたのはやはり危險を畏れた爲であつた。が併しそれは彼に遠大な志があるからであつた。話は彼の若い騎兵時代に遡つた。彼は隊第一の放蕩者であり、剛情な性格から牛耳をとることが何よりも好きで、大酒と決闘によつて仲間の憧憬を受け、自らも冷やかにその光榮をたのしんでゐた。然るに突然彼の前に大敵が現れた。若さ、奇智、美しさ、陽氣、勇氣、名高い家名、巨萬の富、それらを具へた男の出現は確に大脅威であつた。忽ち二人の爭ひとなつた。シルヴイーの奸計が効を奏して二人は愈決闘をすることになつた。

....Estis je tagiĝo. Mi (Silvio) staris sur difinita loko kun miaj tri sekundantoj. Kun neesprimebla malpacienco mi atendis mian

kontraŭulon. La printempa suno leviĝis, kaj jam sentiĝis varmo. Mi lin ekvidis el malproksime. Li piediris, kun uniformo sur la sabro, akompanata de unu sekundanto. Ni ekiris al lia renkonto. Li proksimiĝis, tenante ĉapon, plenan je merizoj. La sekundantoj mezuris inter ni dekdu paŝojn. Mi devis pafi la unua; sed mia kolerekscitiĝo estis tiel forta, ke mi ekdubis pri celtrafeco de mia mano kaj, por doni al mi tempon por kvietiĝo, mi cedis al li la unuan pafon; mia kontraŭulo ne akceptis. Oni decidis loti; la unuan numeron gajnis li, la ĉiama favorato de la sorto. Li ekcelis kaj trapafis mian ĉapon. Nun estis mia vico. Fine lia vivo estis en miaj manoj; mi rigardis lin avide, penante rimarki almenaŭ iun ombron de maltrankvilo. Li staris sub mia pistolo, elektante el sia ĉapo maturajn merizojn kaj elbuŝigante kernojn, kiuj alflugis ĝis mi. Lia indiferenteco min frenezigis. „Kion utilos, — mi pensis, — lin senigi je vivo, kiam li ne multe ĝin ŝatas?" Malica konjekto ekaperis en mia menso. Mi ekdirektis la pistolon malsupren. — „Ŝajne ĉimomente vi ne tro atentas la morton, — mi diris:—vi bonvolas matenmanĝi; mi ne volus vin malhelpi. "—„ Vi neniel min malhelpas, —li rediris: —bonvolu pafi; tamen, agu laŭ via plaĉo; via pafo restas al vi, kaj mi estas ĉiam preta al viaj servoj." — Mi min turnis al la sekundantoj, deklarante, ke hodiaŭ mi ne intencas pafi, — kaj per tio la duelo estis finita… Mi eksiĝis el la regimento kaj foriĝis en ĉi tiun urbeton. De tiam pasis ne eĉ unu tago, dum kiu mi ne estus meditinta pri venĝo. Nun mia horo alvenis…

((【譯】夜明でした。私(シルヴイーオ)は三人の私の方の立會人と一緒に一定の場所に立つてゐました。何とも名狀の出來ないもどかしさを感じながら、私は自分の相手の來るのを待つてゐました。やがて春の太陽が昇つて、もうほゝらぬくさが感ぜられて來ました。すると奴の姿が遠くの方から見え出しました。奴は軍刀の上に制服を着け、一人の立會人に伴なはれて步んで來ました。私達も奴を迎へに行きかゝりました。みると奴は野生の櫻んぼを一杯に容れた帽子を持つて近づいて來るのでした。立會人達は二人の間に十二步の距離を計りました。私が最初に射つことになりました。が何しろ私は憤怒に昂奮しきつてゐましたので、自分ながら手が震へずに甘くれらへるかどうかゞ疑はれ出しましたので、氣が靜まる時間をとるために、奴に第一發を讓つてやりました。ところが相手は聽かないんです。そこで籤を引くことに定めて、やつてみたんですが、結果は奴が先です、いや何時もながら運のいゝ男ですよ。奴が狙ひを定めて射つた彈は、私の帽子を射拔きました。今度は愈私の番です。とうとう奴の命も私の手の中に在ると云ふものです。私はせめてどこか不安の影もみえないものかと、奴をむさぼるやうに凝視めてみたのです。奴は私の狙を定めたピストルの下に立つてゐたのですが、帽子の中から熟した櫻んぼを擇り出しては種をプツプツ吹き出すので、其が私のところまで飛んで來ました。奴の此しやしやした樣子に私はすつかり逆上して了ひました。が「餘り命の惜しくもない時に命を奪つてやつたとて、何にならう?」とかう私は考へました。するとある意地の惡い憶測が私の頭の中に浮んで來ました。私はピストルを下に向けて云ひました。『どうも今はお陀佛にお氣がかりが無いとみえますな。朝飯を御所望と見受けます。まあお邪魔を致したくはありませんがね。』すると奴の答へはかうなんです。『いや決して邪魔にはなりませんよ。どうぞ射つて貰ひたい、だがまあお勝手にして貰はふ。君の番がまだ殘つてゐる譯だから、何時でもご所望に應じますよ。』——そこで私は立會人の方を向いて、今日は射ないことにしたと言明しました。かうして決鬪は終つたのです。……私は聯隊を退職してこの町に人目を避けることになつたのです。その時以來一日たりとも復讐の事を考へない日はありませんでした。ところが愈私の時がやつて來たのです。))

かう云つて彼が渡した書面にはある人物が若い美しい婦人と結婚する旨が記されてあつた。かくて二人は不可思議な緊張の中に袂を分つた。その後二人は又會ふ機會もなかつた。數年の月日が經つて、士官はN地方のさゝやかな村に住むことゝなつた。生活の單調に倦み疲れて時間の長きを嘆じてゐた士官は偶然にも、程遠からぬ地所に伯爵夫人の地所があつたがそこに今度伯爵夫妻がやつて來ると云ふ評判を耳にした。其夫人の美貌に就ての風評に少からず好奇心を惹かれて、士官は夫妻の到着を聞くと、早速訪れてみた。贅を盡した客間に通されるとやがて感じの好い三十二三の伯爵と美しい夫人が出て來て懇ろにもてなした。然し今まで粗暴な生活に慣れてゐた士官は何となく窮屈を感じたので、一座の氣持を引き立てるために彼は部屋の中をあちこち步き廻つた。とその時、壁に懸かつてゐる額の一つが二發の彈に射拔かれてゐるのに氣

がついた。然も一發の中に他の一發が射ち込んであつた。『之は素敵なあたりですね！』と士官は思はず叫んだ。『さうです。その當りは實際素敵なものです。ところで貴方は射撃はお上手ですか』と伯爵が尋ねた。かうして話が射撃の事に移り、そしてそれが何時の間にかシルヴイーの話になると、驚いたことに彼のシルヴイーの夢寐にも忘れなかつた仇敵こそこの伯爵だつたのである。伯爵の話によれば、結婚後まだ日も淺い或る夕べ、散歩から夫人よりも一足先に歸宅してみると、召使が名も云はぬ見馴れない客人が彼に用があると云つて客間に座つてゐると告げた。不思議に思ひながらうす暗い客間にはいると、ほこりにまみれ髭も長く伸ばした儘の彼のシルヴイーが嚴然と立つてゐた。伯爵の頭髪は一瞬にして倒立つた。併し重苦しい空氣の中で愈決闘を初めることとなつた。夫人の歸る以前に早く片づけて吳れと云ふ伯爵の頼みを冷やかに受けながら、シルヴイーは、悠々として先づ蠟燭を持つて來さした。距離は旣に計られてた。伯爵は戸を閉して、誰もはいつて來ない樣に嚴命して、早く射つ樣に頼んだ。

…Li prenis la pistolon kaj ekcelis…Mi (la grafo) kalkulis minutojn… Mi pensis pri ŝi… Pasis terura minuto! Silvio mallevis la brakon. —„ Mi bedaŭras, ke la pistolo estas ŝargita ne per merizkernoj … kuglo estas multepeza. Al mi nepre ŝajnas, ke inter ni fariĝas ne duelo, sed mortigo; mi ne kutimiĝis celi nearmiton. Ni rekomencu; ni lotu, kiu estas pafonta la unua. "—Mia kapo turniĝis … ŝajnas, ke komence mi ne konsentis … Fine ni ŝargis ankoraŭ unu pistolon kaj kunvolvis du numeritajn biletojn; li metis ilin en la ĉapon, iam de mi trapafitan; mi ree eltiris la unuan numeron. — Ci, grafo, estas diable ŝanca," diris kun frideto, kiun mi neniam forgesos. Mi ne scias, kio al mi fariĝis, kaj kiamaniere li estis sukcesinta min instigi al tio … tamen mi ekpafis kaj trafis jen tiun ĉi pentraĵon. ……………………………………………

—Mi ekpafis, kaj dank'al Dio, maltrafis; tiam Silvio, tiumomente li estis vere terura, komencis min celi. Subite la pordo malfermiĝas. Manjo enkuras kaj kun kriego sin ĵetas al mia kolo. Ŝia ĉeesto redonis al mi mian tut n viglecon.—„ Mia kara," mi diris al ŝi, „ ĉu vi ne vidas, ke ni ŝercas? Kial vi timegiĝis? Iru, trinku glason da akvo kaj rev nu ĉe nin; mi prezentos al vi mian malnovan amikon kaj kamaradon." Manjo tamen ne fidis min — " Diru, ĉu mia edzo diras la veron? "ŝi sin turnis al la terura Silvio: „ ĉu estas vere, ke vi ambaŭ ŝercas?" —„ Li ĉiam ŝercas, grafino, " respondis Silvio: „ iam li ŝercis min vangofrapis, ŝerce trapafis sur mi jen ĉi tiun ĉapon, ŝerce ĵus min maltrafis; nun al mi venis la deziro ankaŭ iom ŝerci … " Kun tiuj vortoj li intencis min ekceli…je ŝia ĉeesto! Manjo sin ĵetis al liaj piedoj. — „ Leviĝu, Manjo, — hontu! mi ekkriis furioze: „ kaj vi, sinjoro, ĉu vi ĉesos mokturmenti malfeliĉan virinon? ĉu vi ekpafos fine, aŭ ne? "—„ Ne," respondis Silvio, „ mi estas kontentigita; mi vidis cian konsternon, cian timon,—mi igis cin ekpafi kontraŭ min; al mi estas sufiĉe, —ci min memorados! Mi cin oferdonas al cia konscienco. " — Tiu-momente li estis forironta, sed haltis ĉe la pordo, rerigardis la trafitan de mi pentraĵon, ekpafis kontraŭ ĝin, preskaŭ ne celante, kaj foriris. Mia edzino kuŝis sveninta; la servistoj ne kuraĝis lin haltigi kaj rigardis lin kun teruro; li eliris sur la peronon, vokis la veturigiston kaj forveturis, antaŭ ol mi retrovis mian konscion.

((【譯】　シルヴイーはピストルを取りあげて、狙ひを定め樣としました　……數分も經つたと思へました。私（伯爵）は妻の身の上を考へました。恐ろしい瞬間がすぎました。とシルヴイーオは腕を下して云ひました。『氣の毒乍らこのピストルには櫻んぼの心がこめてはない。……彈は非常に重いんだ。どうもお互ひの間に決闘が起るんじやなくて殺人が起りそうに思へてならない。俺は武裝しない者を狙つたためしは餘りない。どうだやり直そう。どちらが先に射つか籤を引かうじやないか。』私の頭がぐらぐらとしました。……初めの中は私は承知しなかつた樣です。……がとうとうも一つピストルに彈をこめて二つの番號を記した紙片をぐるぐる巻いて、何時か私が射抜いた帽子の中にそれを入れました。ところが又私が一番を引き當てたのです。——『伯爵、お前はべら棒に運のいゝ男だな』と彼は苦々しさうな微笑を浮べて云ひました。あの微笑と云つたらどんなことがあつても忘れられるものじやありませんよ。私は自分にどんな事が起つたか、又どんな風にあの男が私をそゝのかしてあんな事をさせたか今以て分りませんが、……がともあれ私は發射して、そらこの繪に射ち込んだのです。……………………………………………………私は發射したのですが、神のお蔭か射ち損なつたのです。するとシルヴイーオは、その時實際物凄く見えた

のですが、私を狙ひ初めました。ところが突然戸がパッと開いて、マーニヨが飛び込んで來て、大聲を擧げて私の首に飛びついたのです。妻が現れたので私は又元氣をすつかりとり戻しました。『これお前は僕等が冗談をやつてゐるのがわからないのか。どうしてそんなに恐がるのだ。あつちに行つて水を一杯飮んで又僕等のところに歸つてお出で。僕の舊友で同僚の人を紹介してあげるから。』かう妻に云ひました。がマーニヨは私の言葉を信じません。『云つて下さい。私の夫の言葉は本當なのですか。本當に貴方がたはお二人共冗談をしてゐらつしやるのですか』妻はみるも恐しいシルヴイーオに向つて申しました。するとシルヴイーオは答へました。『伯爵は何時も冗談をなされます。かつて冗談に私の頬つぺたをなぐられました。又冗談にこの帽子を射抜かれました、又丁度今冗談に私を射ち損なはれました。そこで私も、一寸冗談をやつてみたい氣持になつたのです。』かう云つてあの男は私を狙ひ初めたのです。……しかも妻のゐる前で！マーニヨはあの男の足元に身を投げました。『起きないか、マーニヨ、恥を知れ！』私は狂氣のやうにわめきました。『そして、君も、哀れな女を殘酷にいじめるのをよさないか。さあほんとうに射つのか射たないのか。』『いや』とシルヴイーは答へました。『俺の腹の蟲が治まつた。俺はお前の仰天を見た、お前の心配をみた。おれはお前にむりに射たせた。俺は充分だ。お前は俺の事を忘れないだらう。さあお前を正氣に歸させてやらう。』この時あの男は立ち去らうとしてゐたのですが戸口の所で立止つて、私が射抜いた繪を凝視めてゐましたが、やがて殆んど狙ひも定めずに繪に向つて一發放つと出て行きました。妻は氣を失つて倒れてゐました。召使達はあの男を引き止めようともせず、恐る恐る凝視めてゐました。私が正氣に歸る前に、あの男はもう石段の上に出て御者を呼んで、乘つて行きました。》

伯爵は口をつぐんだ。かくて不可思議な事件の結末がついた。士官はその後彼と逢はなかつた。たゞ人のうわさでは、シルヴイーオはギリシヤの叛亂に身を投じて、Skulani の戰ひに討死したと傳へられてゐた。

（終り）

〔85頁質疑應答の續き〕

ぬのでやめました。所で oficiala か否かをきめるには最近 Akademio からでた Oficiala Klasika Libro de Esperanto を唯一の信憑すべきものときめ、之の誤植らしいのは（之はたまに誤植があります。）Wüster の Of. R. や他の辭典を參照しました。O. K. L. 中でも Parto I 及 Parto II の表の中にあるすべてを oficiala とみましたそして同書の最後についてゐる landnomoj の表にでゝゐるものを、oficiala とみませんでした。O. K. L. の序言 (Klariga Noto) 中にもこれについては何とも書いてないので oficiala とみるべきか否かまよひましたがあれは單なる konsilo として示したにすぎないのだと思ひましたから結局 oficiala とはしなかつたのです。（Bennemann は oficiala に入れてゐますが）。O. K. L. では f' のものは固有名詞と文字の名前と hispano 等の國民名國名を除いたすべてのものを、oficiala にしてゐるやうです。ですから diplomatio や ĉies, ĉiom, ĉial, nenial, neniom 等 oficiala に入つてゐます。しかし Mario, Anno, Aleksandro, Nikodemo, Nikolao, Berlino（これらは Bennemann も oficiala にしてをりません。）hispano, anglo, franco 等は oficiala になつてゐません、新撰エス和辭典ではなるべく不必要な radiko を少くするために Mario, Nikodemo 等の人名は別に譯語をつけるべき語でないので省略したのです。之等基督敎名は附錄としてつけたいと思ひましたが頁數の上から割愛しました。

★問7　英語で宮城を Imperial Palace と云ひますから Esp. で Imperia Palaco としてはいけませんか。（二月號 Revuo 43頁に Imperiestra palaco とありますが）。（S-M-K氏）

★答7　Imperia より Imperiestra の方が論理的だと思ひます。英語の Imperial といふ形容詞は Emperor (=Imperiestro) と Empire (=Imperio) の兩方の形容詞です故に英語の Imperial には「皇帝の」と「帝國の」と云ふ兩方の意味がある。エス語では區別する方がよいと思ふ。Imperia Ĝardeno なら國立の公園 (ŝtata gardeno) の意でもありませうが Imperiestra Ĝardeno なら新宿御苑といふやうなものにあたりはしないかと思ひます。英語ではこの兩者の區別ができない。（勿論兩方動詞にして前置詞を使用すればできるが）。

紙面狹隘の爲質疑が手許に山積してゐますが近々暇をみて直接質問者へお答へいたします。一般的興味の多いもののみを誌上へ掲載します。

單語研究雜話

[3]

川崎直一

4. ŝindo 再び

安田勇吉さんから"ŝindo は shingle (英), Schindel (獨), galet (佛) に相當すべき語の様に覺え申候へども全然同じものには御座無候屋根板とは大板, 柿板(コケライタ), 栩板(トチイタ)等の屋根を覆ふ數種の板の總稱にて, ŝindo の譯は柿板とする方適譯かと存候。Schindeldach, Strohdach と對立して用ひられる以上, ŝindo の譯として屋根板は, 小生等にとり奇に感じられ申候へどもこれは勿論 termino としての話に候て一般には如何に候や計り知れず候。(犬を四足獸とする意味にて屋根板とするも許さるべく候)。尙コケラは柿にて柿(カキ)には御座無く, 御注意までに"

同じ vorto でも普通語としての時と, 專門語としての時とを區別せねばならぬ事を注意されたのは同感。Chif さんが大成エス和のあの堂々たる緖言に於いて, "又 cement-o は *Universala Vortaro* には ciment, lut とあり明かに接合用セメントの義なり; 是に術語として「練鋼用炭粉」の義を加ふるは差支なきも佛蘭西語に拘泥して, 殊更に cement-o の意義を變更して「錬鋼劑」(佛語 cément) とし, 普通のセメントに對して別に ciment-o を用ふるが如き (*Enciklopedia Vortareto*) は專斷と云ふべし。故に此の類の變更は一つも之を採らず" 以上の文に對して二つの意見がある。一つは cemento は, 普通語としての時は「普通のセメント」の義で, 專門語としての時は「練鋼用炭粉」と使われる場合もあると考えられる。も一つは, cemento の外に cimento を持つのは, 普通の時には良くないが, 專門的の時には却つて良いとも考えられる。(勿論專門家が區別せねばならぬと認めた場合であつて, フランス語にあるか, ないかは問題でない。もし良い習慣であつたらフランス語からでも, ホッテントット語からでも取入れたらよい。参考: Wüster, *Enciklopedia Vortaro* はこの區別を認めている)。

ついでに今 Chif さんのあげられた Verax, *Enciklopedia Vortareto Esperanta* は多少の專斷はあるにしても, 專門辭書に乏しい現存では, かなり役に立つと思う。例えば azimuto とは何かと調べたい時之をひくと "angulo inter la meridiano astronomia aŭ magnetika kaj la vertikala ebeno (aŭ vertikalo), kiu trapasas astron aŭ teran punkton (R.)" とあり, gamopetala をひけば "kvalifikas planton, kies flora korolo konsistas el petaloj kunligitaj" と出る。適當な注意を忘れずに, 大に利用すべしである。

5. vespo 再び

丘英通さんから, "La vespo-abelo problemo は眞相を傳へて居らぬ樣に思はれますから, 一寸御注意申し上げます。あれは S-ro Muto-Marx が verda vespo としたのを私が verda abelo と訂正される樣御忠告したのです。實際ヨーロッパ人がかの二者を區別する神經過敏さは恐れ入る程で, 蜂全體に關する書物を書けば必ず表題として "Bees and Wasps" とか "Les Abeilles et les Guêpe" とか "Bienen und Wespen" とします。Abelo は勿論蜜蜂ですが, 廣くは蜜蜂に似た蜂(隨分不正確ないひ方ですが)全體を指し, いはゆる蜜蜂は Honey-bee, Honigbiene とか, 或は l'abeille vrai, l'abeille proprement dite とか書いてはつきり他と區別します。丁度 frato を日本語に譯する時に兄か弟かどつちか確めなければならぬ樣に「蜂」をヨーロッパ語又はエスペラントに譯する時には abelo か vespo かを確めなければなりませぬ。ついでに申し上げますが, krabro といふのは大きな胡蜂で vespo なる kategorio に屬す可きものです."

19. cekumo.

八木日出雄さんから「盲腸」の originalo はラテン語の caecum です。ラテン語で caecum は blinda とゆう意味の adjektivo です, Virseksa の時は caec*us*, virinseksa の時は caec*a*, neŭtra の時は caec*um* と變ります。そこで「腸」は intestin*um* とゆう neŭtra substantivo ですから blinda も um の finaĵo をとつて "intestinum caecum" となりました。これが originalo であります。ところが始めの intestinum を一々ゆうのが面倒なため略されて, caecum だけをゆうようになり, caecum が「盲腸」とゆう言葉になりました。

Angle: Caecum (blind intestine とゆうことは無いようです。) France: Caecum 又は Cécum. (aveugle とゆう言葉を使わないようです。) Itale: Cieco. Nederlande: Caecum. (blind ingewand ともいいます)。 Germane: Caecum. (Blinddarm を普通にはよけい使います)。 Japane: 盲腸(又は闌腸)。 闌=ふせぐさえぎる。Caecum の譯のようです。故に blindintesto とゆうよりも, cekumo のほうが internacia vorto です。[前月號誤植多く申譯なし正誤表本誌廣告第四面にあり。 編輯者]

質疑應答

岡　本　好　次

★問 1. Juglando と nukso の相違。(中村)

◇答 1. juglando は胡桃(くるみ——學名 Juglans)の樹の果實(卽ちくるみの實)の名稱です。その樹は juglandujo と云ふ。植物の名を呼ぶ時は juglando はくるみをさします。nukso とは胡桃の實のやうな堅い果實を總稱していふので juglando も nukso の一種です。しかし堅い果實の中くるみが最も有名なので nukso といつて胡桃の實を云ひ表す場合があります。「太閤」とは關白の父である前關白を云ふのですが豐臣秀吉の殆んど獨專の樣になつたのと同じ事です。

★問 2. ciklo, biciklo, bicikleto の相違如何。

◇答 2. Kabe の辭典によると biciklo とは二輪車で後の車輪が前より小さいのを云ひ、前後兩車輪が同じ大さの二輪車を bicikleto (又は bicikledo) と云ふとしてゐます。ciklo は二輪車三輪車等の總稱です。velocipedo といふ語も ciklo と同一の意味の語で總稱です。Millidge は biciklo と bicikleto との區別をしてゐません。Kabe の呼び方はフランス式によんだものと思ひます。(G-Maupin Verax 兩氏も同樣)(佛語では bicycle bicyclette の區別をする)。英語では此の區別をしないから Millidge はしてゐない。Wüster は biciklo を單に二輪車の意(Millidge に同じ)にすべしとしてゐます。そして biciklo を分類して altsela biciklo と malaltsela biciklo とにわけてゐます。(前者は兩輪不同後者は兩輪同大のものをさす)。此の分類が最もよいと思ひます。三輪車は triciklo といふ。

★問 3. 東京駐在佛國大使といふ場合 franca ambasadoro *al* Tokio と fr, amb. ĉe (又は en) Tokio と何れにても可なりや。

(M. Takahaŝi 氏)

◇答 3. どちらでもよいと思ひます。Tokio へ派遣した(された)といふ側からみれば al でせうし Tokio に駐在するといふ側から ĉe (又は en) でせう。

★問 4. Japanujo を Nipponlando と稱する事の可否につき貴見承りたし。(同氏)

◇答 4. Akademio で發表した國民名及國名の中でも既に Japanujo は採用されてゐるのですから別に變更の要なしと思ふ。Nipponlando とすれば國民を何とよぶかが問題でせう。(Nipponlandano, nipponujano, nipponiano ?)若し日本を Nipponlando といはればならぬといへば芬蘭は Suomi 洪牙利は Magjarujo 獨逸は Doiĉlando と呼ばればならぬ事になつて折角これ迄きまつてゐる國名をすつかり改造せればならなくなります。然も Nippon も Japan も共に元をたゞせば「日本」(「日の本の意」からでた)と云ふ字を支那風に讀んだ際讀み方の訛から二つになつたものにすぎないのですから。

★問 5. Kabe の Vortaro de Esperanto の初版は何年に出ましたか。(Kawasaki-N.)

◇答 5. 1910年の La Revuo 誌をみますと四月號には baldaŭ aperos と廣告があつて定價は未定となつてをり五月號には ĵus aperis と廣告がてゝゐ(定價は 4 fr. とでゝゐます)ますから、1910年4—5月頃出版されたものと思ひます。

★問 6. Wüster の Oficiala Radikaro によれば f' diplomatio です (f'=montras, kie troviĝas la resp. vortoelemento en la cetera Fundamento aŭ ekstervice en la U. V.)。

この本には f' は全部 Oficiala Radikaro に入れてありますが、新撰エス和辭典には f' diplomatio だけ diplomati-o° とやり他の f' hispano 等には ° をつけず f' Mario にいたつては全く影も形もありません、何故同じ f' でありながらこう三種に差別待遇せられるのですか。(Kawasaki-N.)

◇答 6. Wüster の Oficiala Radikaro 中の f' 卽ち Fundamento de Esperanto の中の Universala Vortaro の見出し語以外の箇所にあるすべての語根を全部 oficiala とみるか否かは問題だと思ひます。そして辭典によつて oficialaj vortradikoj が多少ちがつてをります。それは一つは誤植もありましようが一つは多少の見解の相違だと思ひます。それで新撰エス和辭典の編纂の際には如何なる決定にしたがふが最も穩當かと思つてをりました。初めは Wüster 氏の Oficiala Radikaro の樣に f' f 123の別區をし又同氏の Enciklopedia Vortaro の樣に Z 博士の使用したのが判つてゐる語には Z の符號をつけようかと思ひましたが却つて煩雜だからすべて oficiala vortradiko は Bennemann にまれて右肩に ° をつけました。Z の符號の方は活字を澤山買はればならら

〔以下83頁下部へ續く〕

Doppo Kunikida

FATALISTO

—[3]—

〔國木田獨歩原作『運命論者』連譯小説第三回〕

[Laŭ la peto de l' redaktoro tiun ĉi noveleton tradukas dekkelkaj eminentaj sinjoroj laŭvice.]

Ĉapitro II

tradukis D-ro Hiroshi Ohshima, Profesoro de Kiusiu Imperia Universitato.

"JEN, bonega brando... Pardonon, ke mi mem laŭdu ĝin. Kiam mi vizitis Tokion antaŭ nelonge, mi petis ĉe Kameja-Butiko de Ginza plejbonan brandon, kaj mi sekrete prenis kun mi tri botelojn, kiujn mi kaŝis tie ĉi. Unu el ili mi jam finis, kaj forĵetis la malplenigitan botelon en la rivereton Nameri-kaŭa. La duan ni havas nun antaŭ ni. Restas la tria ankoraŭ kaŝata en la sablo. Kiam ĝi elĉerpiĝos mi iros denove aĉeti aliajn."

Mi akceptis de li proponitan glason, kaj el ĝi trinketante aŭskultis lian rakonton. Dume, mi ne povis senigi en mia koro pli kaj pli kreskantan suspekton pri li. Tamen neniom mi volis miksiĝi en lian sekreton.

"Nu, ĵus alveninte ĉi-tie antaŭ minutoj, mi trovis vin jam okupinta la lokon tute neatendite. Granda estis mia surprizo. Kia skandalo! Entrudi sin en mian sekretan vinejon, rabi de mi la festenejon, kaj legi libron senhonte! Tiom mirigite mi fikse enrigardadis vin kaj ne povis foriri." diris li kun rideto.

En liaj okuloj ekbriletis lia milda, honesta personeco kaŝita en la fundo de l'animo. Tio estis al mi despli doloriga. Do mi ankaŭ montris rideton, kaj respondis.

"Devas esti. Se ne, vi ne estus ĵetinta al mi tian rigardon. Vi ja aspektis tiom ofendiĝa."

"Ne. Mi ne sentis ofendiĝon, sed estis al mi mizerege. Dio mia! Miaj sekretigitaj brandboteloj ankaŭ devis humiliĝi sub la koksojn de iu nekonatulo! Tiel mi malbenis mian fatalon. La vorto 'malbeni' sonus iel terura. Sed verdire al mi mankas tia terura intenco, tia kuraĝo. La fatalo min malbenas

---

〔運命論者〕——連譯小説第三回

【註】 brando ブランデー。 laŭdi ほめる。 antaŭ ne'longe 先日, さき程。 butiko 店。 sek-rete 私(ヒソカ)に。 for'ĵeti なげすつ。 mal'plen'ig'it'a 空(カラ)の。 la duan (botelon)。 kaŝ'ata かくされてゐる。 el'ĉerp'iĝ'i なくなる,くみつくす。 de'-nove 更に。 akcepti 受ける。 propon'ita 申出た(差出れた)。 trink'et'ant'e。 sen'ig'i なくす。 pli kaj pli 益々。 kresk'anta 増大す。 suspekto 疑惑。 miks'iĝi=sin miksi 立入る。 antaŭ mi-nutoj 數分前。 okup'int'a 占領せる。 ne'atend'it'e 意外に,不意に(豫期せられずしての意)。 sur-prizo 驚駭。 skandalo 悪漢。 en'trudi さしでる。 sen'honte 恥ぢずに。 mir'ig'ite おどろいて。 en'rigardi みつめる。 rid'eto 微笑。 ek'bril'et'is。 milde 穩かな。 person'ec'o 人柄(品性)。 fundo 奥。 despli 猶益々。 dolor'ig'a いたましい。 devas esti そうでせう。(しかある筈だ)。 as-pekti そういふ風態。 ofend'iĝa 侮辱を感ず。 humil'iĝi 侮辱にあまんず。 kokso 臀。 ne'kon'-

. . . Ĉu vi kredas je la fatalo? Ĉu, je la ekzisto de la fatalo? . . . Prenu pli da brando." Ĉe tiuj ĉi vortoj li levis la botelon.

"Ne. Mi ne trinkos plu." Mi redonis al li la glason, kaj respondis: "Mi ne estas fatalisto."

Li verŝis brandon por si mem en la glason, trinkis, kaj eligis vinodoran spiron. "Ĉu vi do estas akcidentalisto?"

"Mi nur kredas la leĝon de l' kaŭzo kaj rezulto."

"Sed tre ofte okazas, ke falas sur la homon ne nur rezulto kiel rekta konsekvenco de la homa kapablo, sed ankaŭ tiuj rezultoj, pri kiuj neniu homo havas respondecon, tio estas, kaŭzitaj de iu superhoma potenco. En tia okazo, ĉu vi ne sentas la ekziston de iu superhoma potenco, nome fatalo?"

"Jes, mi sentas. Sed tio, kion mi sentas, estas la potenco de l'naturo. Kaj ĉar mi firme kredas, ke en la naturo neniu fenomeno estas ekster la leĝo de l' kaŭzo kaj rezulto, mi ne volas aldoni al tiu potenco iun misteran terminon kiel fatalon."

"Ĉu jes? Mi komprenas. Vi do opinias, ke ekzistas neniu mistera en la universo. Alivorte, al vi la signifo de l' homa vivo en la universo estas tre facilvidebla kaj klara. En via cerbo ĉio estas solvebla per la fundamentaj teoremoj, kiel 'Dufoje du estas kvar.' Via universo estas ebena, sed ne solida. La fakto de la senfineco aŭ eterneco estas do al vi neniel granda, reala fakto, kiu meritas viajn interesiĝon, adortimon, kaj mediton. Post ĉio vi estas kolego de tiuj matematikistoj, kiuj penas formuli la senlimecon per nur vico da ciferoj."

Li ĝemis dolore, kaj daŭrigis per tono flegma kaj mokema: "Sed eble tia penso estas pli feliĉiga. Laŭ miaj vortoj, vi estas feliĉulo benata de l fatalo, kaj laŭ viaj vortoj, mi estas kompatindulo suferanta pro malfeliĉa rezulto."

"Nu, permesu min diri adiaŭon." Subite mi leviĝis.

Kun konsterno li rapide retenis min. "Momenton, mi petas. Ĉu vi koleriĝis? Se mia diro al vi malplaĉis, mi petas vian pardonon. Turmentante min memvole, mi pensadas absurdajn vantaĵojn, kaj babiladas senpripense. Ne. Al neniu mi diris tian aferon. Sed, ĉar senvole al mi venis la deziro diri nur al vi, mi maldece babilaĉis sensencan fanfaronaĵon. Eble vi mokridus min. Al mi tamen ŝajnas, ke iu mistera fatalo nin ligas unu kun la alia. Kompatu min, kaj daŭrigu interparolon . . . nur iom plu."

---

at'ulo 見知らぬ人。**mal'beni** 呪ふ。**ver'dire** 實を云へば。**intenco** 意志。**fatalo** 宿命，運命。**plu** この上。**re'doni** 返す。**verŝi** 注ぐ。**el'igi** だす。**vin'odora** 酒の匂のする。**spiro** 息。**akcidentalisto** 偶然論者。**leĝo de l' kaŭzo kaj rezulto** 原因結果の理法。**kiel rekta konsekvenco** 直接の結末として。**respond'ec'o** 責任。**super'homa** 超人的。**potenco** 權力。**nome** 卽ち。**firme** 固く。**fenomeno** 現象。**termino** 術語。**universo** 宇宙。**facil'vid'ebla** 見易い。**mistera** 神秘の。**ali'vorte** 換言すれば。**teoremo** 定理。**ebena** 平面の。**solida** 立體の。**sen'fin'eco** 無限。**etern'eco** 無窮，永劫。**reala** 現實の。**fakto** 事實。**meriti** 値す。**interes'iĝo** 感興。**ador'timo** 畏懼。**kolego** 仲間。**matematik'isto** 數學者。**formuli** 式で示す。**vico da ciferoj** 數字の連續のみ。**ĝemi** 嘆息す。**flegma** 冷淡な。**subite** 俄かに。**konsterni** 仰天す。**re'teni** とめる，制す。**mal'plaĉi** 氣にさはる。**mem'vole** 自ら進んで。**absurda** ばかな。**vant'aĵo** 空虛な事。**sen'pri**

"Sed mi ne plu havas aferon priparoli..."

"Ĉesu esti senkompata. Bonvolu resti tie ĉi pliajn minutojn. Nur minutojn. Ve! Kio igas min diri tiel senrezone? Ĉu ebriiĝo? Ne, la fatalo! la fatalo! Bone. Se vi havas nenion priparoli, mi parolu. Aŭskultu mian parolon, mi petas. Nur aŭskultu pri mia malfeliĉa fatalo..."

此連譯小說は毎月交代でエス界の諸先生にお願ひして飜譯していたゞきます。今回は九州帝國大學農學部動物學教授理學博士大島廣先生にお願ひしました。先生は特に英語に御堪能な方で、その流暢な英語で外人をさらへてエス語の宣傳をせらるゝさいふ熱心さで、しかもエス語も大變御達者なことは此名譯をお讀みになればごなたもお判りの筈。

LA VERDA NEBULO

(Japana Legendo pri Norda Banloko)

[*daŭrigo*]

MASUZO INOUE

"Ho, pardonu, Panjo! Mi bone memoras ilin. Mi tre volis, jes tro volis rapidi hejmen. Hieraŭ en la valo ŝvebis verda nebulo. Kaj spite de tio, mi venis sur la ŝtipponto kaj falis en la valon. Kaj perdinte vojon, mi vagis en la valo la tutan nokton por serĉi la vojon al la hejmo."

Je la vortoj la patrino silente rigardis la filon dum momentoj. En la suspektemaj okuloj fine eksplodis indignaj larmoj. Al li ŝajnis, ke li aŭdas virinan ĝemploron el la malantaŭa ĉambro.

"Fi, mensogulo! Kial vi estas viva, eĉ sen vundeto, falinte de sur la altega ponto? ...Diru la veron! Vi estis ĉiam en via vivo tute bona, honesta knabo. Vi revenis ĉiuvespere tute akurate, neniam iris al la urbo sen mia konsento. Neniam vi noktis aliloke ol en la hejmo. ...Kredeble diabla tento vin logis al la urbo, ĉu ne? Vi noktis ie en la urbo, dum via fianĉino kun ĉagreno vin atendis vane. Diru la veron, mia filo! Via panjo estas fatale malsana de dumnokta maltrankvilo"

"Pardonu, Panjo! Mi volas malkaŝi la veron, tamen mi ne povas. Sed estas ja vero, ke mi ne iris al la urbo kaj ke mi falis en la valon. Pardonu ĉiel, mia kara patrino!"

La junulo ekvolis enpaŝi tra pordon.

"Ne, vi ne devas eniri! ...Dum vi restas mensogulo..."

---

pense 考へなしに。mal'dece 無作法に。mok'ridi 嘲笑す。sen'rezone 理にあはぬ。eb.i'iĝo 醉ふ事。

〔綠の靄——北國温泉場の傳說〕

【註】 memori 記憶す。hejm'e'n 家へ。rapidi 急ぐ。ŝvebi たゞよふ。spit'e de tio それにも拘らず。ŝtip'ponto 丸木橋。vagi さまよふ。serĉi 探す。suspekt'ema 疑深い。eksplodi 爆發す。indigi 激怒す。larmo 涙。ĝem'ploro 嗚咽。mensog'ulo 嘘つき。vund'eto 小傷。en la vivo 生涯に。akurate 正確に。konsento 同意。nokti 夜をすごす。ali'loke 他處で。kred'eble 多分。diabla tento 惡魔の誘惑。logi 誘ふ。fianĉ'ino 許嫁。ĉagreno 煩悶。fatale mal'sana 命にかゝはる程の重病の。dum'nokta。mal'trankvilo 不安。mal'kaŝi うちあける。en'paŝi ふみ入る。mal'helpi 妨ぐ。laŭ'vole 隨意に。mal'san'lito 病床。sam'tempe 同時に。embaras'ita こまつた。sen'kulp'igi 罪をなくす。sin turni 身をむける。trem'voĉo ふるえ聲。fiksi

La patrino malhelpis lian eniron per ambaŭ brakoj.

"Iru ien ajn laŭvole! Mi restos sola en malsanlito."

Aperas subite mirinde bela junulino, dirante, "ĉu mi ne povas resti?" Samtempe ŝiaj okuloj renkontis tiujn de la embarasita junulo.

Li estas en la plej terura konfuzo. Li pensis kaj pensis lasante siajn okulojn teren.

"Ĉu mi foriru, forlasante Panjon? Do kien? Ŝia malsano fariĝos pli kaj pli grava. Krome kiel fariĝos la fianĉino? La bela, aminda knabino! Nu, mi decidu la duan fojon min riski, kaj diru la veron antaŭ la ambaŭ karaj, por senkulpigi min."

La patrino sin turnis silente kaj ekpaŝis malantaŭen. La filo vokis per tremvoĉo.

"Panjo, kara Panjo! Mi fine kuraĝas diri la veron, por min senkulpigi. Atendu do unu momenton, Panjo! Mi neniel povas vin lasi sola."

Haltis la patrino kaj turniĝinte al li, fiksis la okulojn al la liaj. La fianĉino, ankoraŭ kun larmaj okuloj, levis sian vizaĝon, starante apud la maljunulino.

"Aŭskultu, Panjo! Mi falis, kiel mi jam diris antaŭe, de sur la ponto kaj svenis dum kelka tempo sur roko en la valo. Kiam mi vekiĝis mi kun doloro trovis miajn genuojn terure vunditaj. Mi tuj ĉirkaŭvolvis la krurojn per zontuko kaj serĉis la vojon. Rigardinte malfortan lumon en malproksimeco, mi rapidis tien kun dolorantaj piedoj...

Li daŭrigis la rakonton; la mirindan okazintaĵon, la sekreton de la banputo.

"Mi ĵuris al la maljuna virino ke mi neniel kaj neniam malkaŝos la miraklon. Mi ne volis perfidi la ĵuron, tamen dio mia! Se mi ne ĝin malkaŝas, mi neniel povas min senkulpigi. Estas tute nature, ke vi suspektas min, vidante min tute sana kaj ne sciante pri la okazintaĵo."

Dum la rakontado, lia voĉo pli kaj pli raŭkiĝis kaj la vizaĝo pli kaj pli paliĝis. Kaj je la fino de siaj vortoj li falis sur la sojlon.

"Ha, kio okazas al vi?" La patrino kliniĝis al li.

"Devas esti venĝo de la feino. Mi mortos kontenta je via tuta kompreniĝo. ..." Kaj li ekspiris la lastan spiron en trankvila, paca apatio.

Konsterniĝis ambaŭ virinoj. La patrino vokis kaj vokis la nomon de sia filo sed tute vane.

ぢつさみつむ。sveni 失神す。vek'iĝi 眼ざむ。ĉirkaŭ'volvi まきつける。zon'tuko 帶布。okaz'int'aĵo 事件。ban'puto 浴井。ĵuri 誓ふ。miraklo 奇蹟。perfidi 裏ぎる。raŭk'iĝi しわ嗄れる。pli kaj pli 益々。pal'iĝi 靑ざめる。sojlo 閾(シキ)。klin'iĝi 身をかゞむ。venĝo 復讐。fe'ino 妖女。kompren'iĝo 了解。apatio 無感覺。konsterniĝi 仰天す。tro'a あまりの。mort'igi 殺す。pere'igi 滅す。bo'pa'njo お母さん(姑へ)。ĝeni sin 氣兼ねす, 苦しむ。kaŭzo 原因。preferi えらぶ。pluaj 之以上の語は。ĉirkaŭ'preni 抱擁す。

[4] kompatinda かはいそうな。torĉo 炬火。esting'iĝi 消える。vid'iĝi 見える, あらはる。sorĉ'ist'ino 魔法使ひ(女)。stariĝi 立つ。kapelo 祠(ホコラ)。di'servi 勤業す。monaĥ'ino 尼。Ubaju 姥湯。laŭ'litere 文字通りにいへば。varm'akvo 湯。atingi 到達す。supr'e'n'marŝo 登攀。vin ĝenu neniom plu は もはや御心配なさいますな。fali は高所から落ちる意の外に倒れるといふ意味もある。fal'eti はつまづく意。

"Ho ve! Mi estas peka. Mia troa suspekto lin mortigis. Mi estas mortiganto. Pardonu! Ho, pardonu, kara filo." Sin turnante al la knabino ŝi daŭrigis, metante sian manon sur ŝian dorson.

"Mi devas peti ankaŭ vian pardonon. Mi pereigis vian edzon."

"Ne, bopanjo. Vin ĝenu neniom plu! Ankaŭ mi estas peka por lia morto. La kaŭzo estas ja mi mem. Nur pro mi li volis tro rapidi hejmen kaj preferis la danĝeran vojon. Do mi ankaŭ estas mortig . . ."

La pluaj vortoj malaperis en la ploremon. Ambaŭ virinoj sin ĉirkaŭpreninte ploradis dum longa, longa tempo.

[4]

La saman tagon vespere la mirindan banputon vizitis la kompatindaj virinoj. La torĉo estas estingiĝinta. Nenie vidiĝas la sorĉistino.

* * * * * * * *

Post kelkaj tagoj apud la banputo stariĝis malgranda kapelo, kie diservas du monaĥinoj. Deposte dum miloj da jaroj restis la kapelo, kies fundamentŝtonoj ankoraŭ nun restas sur monteto en la valo. La loko estas nun konata kiel banloko-Ubaju (laŭlitere varmakvo de maljunulo). Oni povas atingi ĝin post trihora suprenmarŝo de la stacio Tooge, Oou-Linio.

——[FINO]——

BRAVULO KAJ VULPO

T. MURAKAMI.

Antaŭ kelkaj jaroj, en printempo, mi faris vojaĝon per piedoj. Ne havante difinitan celon krom amuziĝo, mi preferis min direkti al izolitaj lokoj, netuŝitaj de detruema mano de nuntempa civilizacio.

Iun vesperon mi venis al unu vilaĝo, kiu havis aspekton tre simplan kaj primitivan, kaj estis ĉirkaŭata de ombraj montoj.

"Ha, paca vilaĝeto!" mi flustris al mi mem, kaj sentis, ke la milda atmosfero reganta la vilaĝon influis komforte sur mian lacan animon. Ĉar jam krepuskiĝis, mi decidis nokti tie, kaj post serĉado mi trovis farmistan domon; kvankam ĝi ne estis gastejo, mi povis esti akceptita por pasigi la nokton.

La domo estis sovaĝa, tamen sufiĉe vasta: Sur muroj pendis kelkaj feloj de vulpoj ankoraŭ tute ne rafinitaj; kaj rigardante ĉirkaŭen mi trovis ĉe unu angulo pafilon, kiu konvinkis min, ke la domestro havas duoblajn profesiojn: nome li estis farmisto kaj ĉasisto.

Dum malluksa vespermanĝo, kiun mi prenis kun la bonkoraj hejmanoj, mi sciis pere per iliaj buŝoj, ke en montoj ĉirkaŭ la vilaĝo nestas abundo da vulpoj; kiom ajn oni pafas ilin, ili ne pereas, kaj eĉ plimultiĝante ofte kaŭzis al la vilaĝanoj domaĝon.

De antikva tempo, en Japanujo, tradicio de vulgara popolo diras, ke vulpo estas spirita besto, havas miraklan kapablon je metamor-

---

〔若者と狐〕

vojaĝo per piedo 徒歩旅行。**difin'ita** きまつた。**amuz'iĝo** 娯樂。 **direkti** へ向ける。 **izol'ita** 孤立した。**ne'tuŝ'ita** 觸れられてゐない。**det-ru'ema** 破壞的。**nun'tempa** 現今の。**civilizacio** 文明。**aspekto** 外觀。**primitiva** 原始的。**ĉirkaŭ'-ata** とりまかる。**flustri** さゝやく。**atmosfero** 雰圍氣。**reg'anta** 支配す。**influi** 影響す。**kom-forte** 氣持よく。**krepusk'iĝi** 黃昏れる。**nokti** 泊まる。**farm'isto** 百姓。**gast'ejo** 宿屋。**pas'-igi** すごす。**sovaĝa** 粗野。**sufiĉe** 十分に。**vasta** 廣い。**felo** 毛皮。**vulpo** 狐。**rafin'ita** 精製された。**paf'ilo** 鐵砲。**nesti** 巢くう。**abundo da** 夥しい。**perei** 滅ぶ。**domaĝo** 損失。**antikva** 太古の。**tradicio** 傳統。**vulgara** 世俗の。**mi-rakla** 奇蹟的。**kapablo** 能力。**metamorfozo** 變身。**stult'eco** ばかげた事。**komik'eco** 滑稽な事。**naiv'eco** 無邪氣さ。**kred'anto** 信者。**kon-cerne al** に關し。**tiel nom'ata** 所謂。**talento** 才能。**interalie** その中で。**ĉarmo** 魅力。**su-**

fozo; ĝi povas ŝanĝi sin en ian ajn formon kaj povas intenci bonon aŭ malbonon laŭvole kaj laŭcirkonstance.

Mi baldaŭ rimarkis, ke tia malnova tradicia rakonto, spite siajn stultecon, komikecon, troan naivecon, ankoraŭ havas multajn kredantojn en la vilaĝo. Koncerne al tiel nomata 'sankta talento' de vulpo, multajn rakontojn mi aŭskultis en tiu nokto. Interalie mi sentis fortan ĉarmon en la jena rakonteto.

* * * * *

Estis antikva superstiĉema tempo, kiam homoj ankoraŭ sin klinis adore antaŭ fetiĉoj kaj ne ŝparis oferon por ekzorcizi.

En la vilaĝo loĝis unu fanfaronema bravulo, kiu diradis propagande, ke li neniom timas magian talenton de vulpo, kaj ankaŭ ke li neniam estos ensorĉita de la malica longnaza besto. La vilaĝanoj ne amis lin pro lia fieraĉo; kaj eĉ preĝadis al dioj, ke li iam estu atakata de ia terura fatalaĵo.

Je unu somera tagmezo, en arda flameco de sunradio, la bravulo promenis kampan vojon. Okaze li trovis, ke kun iom da distanco antaŭ li, montrante al li sian dorson unu vulpo kaŭris sur tero, kaj estis okupata por sin ŝanĝi en ian nebestan formon. La bravulo grimace ridetis, kaj en la koro ĝin mokis, ke kiom ajn klopodas la vulpo, tamen li ne estos trompata.

Kaj haltante li observadis agadon de la vulpo.

La vulpo baldaŭ fariĝis juna virino, bela kiel lotusfloro, milda kiel printempa zefiro.

La bravulo tre miris, en lia brusto la koro batis eksterordinarajn batojn, kaj lia tuta korpo senkonscie tremetis kiel folioj skuataj de aŭtuna kadukiga vento. Sed li baldaŭ konsciis, ke li nepre ne devas trompata de la vulpa ĵonglo, se ne, li ricevas kompromiton.

"Ha, vi estas malica magiisto!" en la koro li diris al la vulpo, "Via sorĉo ne havas indon kontraŭ mi."

Tiam la belulino — metamorfozo de la vulpo — turnis sian vizaĝon al la bravulo, kaj per la okuloj, maldikaj kaj brilaj kiel oraj fadenetoj, ridetis milde.

La bravulo denove tremis, en lia kranio la cerbo kvazaŭ turnrenversiĝis; kaj per granda peno li apenaŭ povis deteni sin kontraŭ la ĉarma rava allogo de la vulpo-virino.

"Mi ne estos trompata," li flustris ŝvitante.

La belulino, per facilaj piedmovetoj ekkomencis marŝi antaŭen. Kun grandege malfermataj okuloj la bravulo postsekvis ŝin. Ili baldaŭ iris tra urba strato, gaja kaj homplena.

La bravulo kun buldoga obstineco observadis la belulinon antaŭ si, kaj pensis, "Kvankam mi tre bone konas, ke ŝi estas vulpo, mi emas kredi ŝin kiel veran homon," kaj momenton poste, alarmis al si mem, "Mi ne estos trompata."

Fine la belulino haltis antaŭ unu luksa domo, turnis sin al li, ĵetis fulman dolĉan rideton al lia vizaĝo, kaj sekvantan momenton jam malaperis en la domon.

Gape li staris kelkajn sekundojn, sed kiam li rekonsciiĝis, li metis sian unu okulon al fendo de muro, kaj tra kiu li observadis internon.

La interna parto de la domo estis pli pompa ol ĝia ekstero, kaj tie la belulino, akompanate de gaja muziko, komencis danci.

La bravulo streĉis sian tutan atenton kaj murmurante, ke li ne estos trompata, observadis kaj observadis.

En tia stato longa tempo pasis. Subite la bravulo sentis ies manfrapon ĉe sia ŝultro, kaj vekiĝis el la ekstazo.

En la momento, la domo, la muro, la fendo, la belulino, eĉ la tuta urba strato, malaperis kiel miraĝa vizio. Li estis staranta sur kampa vojo, kaj tuj antaŭ li, flanke de la vojo, staris unu ŝarĝĉevalo, tra kies piedoj li ĝis nun estis rigardanta ĝian ventron. Apud li staris la frapinto — unu lia konato — kaj kun mirigita mieno demandis lin. "Kion vi faras ĉi tie?"

* * * * *

La rakonteto finiĝis tiel; kaj mi ne aŭdis kion la admirinde persistema bravulo respondis al la demando. Post unu nokta gastiĝo, mi forlasis la vilaĝon frumatene, gratulante min mem, ke mi ne estis sorĉita de vulpo.

---

perstiĉo 迷信。**sin klini** 身をかゞむ。**fetiĉo** 物神(神と崇めた諸物をさす)。**ŝpari** おしむ。**ofero** 犧牲。**ekzorcizi** 魔をはらふ。**fanfaron'ema** ほらふきの。**brav'ulo** 勇者。**magia** 魔術的。**en'sorĉi** たぶらかす。**malica** 悪意ある。**ataki** 襲ふ。**fatal'aĵo** 致命的事件。**tag'mezo** 正午。**arda** 灼熱の。**flam'eco**。**sun'radio** 日光。**distanco** 距離。**kaŭri** うづくまる。**sin ŝanĝi** 變形す(ばける)。**grimace** 齒をむいて。**observi** 觀察す。**lotus'floro** 蓮の花。**zefiro** 微風。**ekster'ordinara** 異常の。**sen'konscie** 無意識に。**kaduk'iga** 萬物を枯らす。**ĵonglo** 手品。**kompromito** 生命にかゝはる事。**sorĉo** たぶらかし。**kranio** 頭蓋骨。**turn'renvers'iĝi** ひつくりかへる。**al'logo** 誘ひ。**ŝviti** 發汗す。**post'sekvi** 後を追ふ。**hom'plena** 人の一杯の。**buldogo** ブルドッグ。**alarmi** 警しむ。**gape** ポiカンとして。**fendo** 裂目。**pompa** 華美。**streĉ** 緊張さす。**ekstazo** 忘我。**miraĝo** 蜃氣樓。**fcr'lasi** 去る。**fru'matene** 早朝。

LA TURO DE LONDONO

Originale verkita de Sooseki Nacume-Kinnosuke.[1)]
Tradukita de D-ro Nisi-Seiho.

Dum mia dujara restado en Eŭropo mi nur unu fojon vizitis la Turon de Londono.[2)] Iam mi volis refoje sed ne kuraĝis. Inviton de amiko mi ankaŭ rifuzis. Domaĝe estus detrui la unuan impreson de l' Turo per la dua vizito; forviŝi ĝin per la tria netolereble. La vizito de l' Turo ne estu do ripetata!

Mi vizitis ĝin post nelonge de mia alveno al la urbo, kiam mi ankoraŭ ne povis distingi eĉ la direktojn. Kompreneble mi tiam ankoraŭ estis tute fremda al la urbo kaj sentis min kvazaŭ leporo de Gotemba[3)] subite forĵetita en la centron de Nihonbaŝi.[4)] Eksterdome mi tiam timis, ĉu mi estus ien forportota per la ondoj de homamasego; dome mi dubis, ĉu trajno kontraŭtrafus mian ĉambron. Tage kaj nokte mi ne sentis min eĉ unu momenton trankvila. Dum du jaroj de mia restado en tiaj bruego kaj amasego de l' urbego, mi timis, ĉiuj fibroj de miaj nervoj fariĝus kvazaŭ rizkaĉo en bolpoto. Mi jam komencis pliserioze pripensi pri la vereco de l' teorio de l' "Degenerado"[5)] de Max Nordau.[6)]

Kaj ĉar mi, ne kiel aliaj samlandanoj, nek havis iun

1) 1866–1916, unu el la plejgrandaj literaturistoj, kiujn ni havis en Meiji-Dinastio. 2) The Tower of London. 3) Fama ĉasloko apud al monto Fuji. 4) Centra kvartalo de Tokio. 5) Entartung. 6) verkisto naskita en Pesto, 1849.

rekomenditan, nek ankaŭ iun konatan en la urbo, mi devis ĉiutage eliri sola kaj timema, kun unu landkarto en la mano, por viziti vidindaĵojn aŭ plenumi iun aferon. Kompreneble mi neniam uzis trajnon, nek mi povis uzi omnibuson. Veturiloj povus forporti min ien, de kie mi tute ne povus reveni. La trajnoj, omnibusoj, tramoj, fiakroj, kiuj ĉie en la urbo ĉiudirekten veturadas, estis al mi neniel oportunaj. Tial mi ĉiam devis elserĉi mian vojon en la landkarto, kiam mi staras ĉe krucvojo, kunpremite de preterpasantoj, kaj kiam la landkarto ne sufiĉe taŭgis, mi demandis iun ajn preterpasanton aŭ policanon aŭ denove alian preterpasanton, kaptante aŭ alvokante, kaj ripetante tion, ĝis mi estis sufiĉe sciigita; tiamaniere mi kutime povis atingi mian celitan lokon.

Ĝuste tiam, kiam, mi povis nur tiamaniere vagadi, mi vizitis la Turon. "Mi ne scias, de kie mi venis kaj kien mi iros." Vi eble prenos la frazon por enigmo, kiam mi al vi tiel diras. Vere mi eĉ nun ne povas diri, per kia vojo mi atingis la Turon kaj tra kiaj stratoj mi revenis hejmen. Tion ĉion mi ne povas rememori. Nur certe estas, ke mi vizitis la Turon. La vizion de l' Turo mi eĉ nun povas klare imagi antaŭ la okuloj. Sed kiel estis antaŭ la vizito? kaj kiel post la vizito? Ambaŭ demandojn mi ne povas respondi. Inter ambaŭ tempspacoj mallumaj tute sendepende brilas hele la intertempo, same kiel la

fulmo disŝirinta noktan vualon frapas min neatendite inter ambaŭ brovoj por tuj estingiĝi por ĉiam. La Turo staras, por tiel diri, ĉe la fokuso de la sonĝo, kiun mi iam sonĝis en mia antaŭnaska vivo.

La historio de l' Turo estas verdire kondensaĵo de tiu de Anglujo. Lumeto ĵetita en nian centojaron tra la fendo de l' estinteco, tiu mistera vualo kovranta ĉion. Tio estas la Turo! Peco de l'antikveco alportita al nia epoko per la fluo renversita de l' tempo ĉion droniganta. Tio estas la Turo! Homa sango, homa karno, homaj krimoj koagulitaj inter nuntempaj kaleŝoj, vagonoj, trajnoj. Tio estas la Turo!

Kiam mi ekrigardis la Turon de l' Tura Ponto[7] trans Tamizon, mi estis jam de ĝi tiagrade absorbita, ke mi ne povis kredi, ĉu mi efektive vivas en nia tempo. La tago trankvila ĉe la komenco de vintro. La cindrogriza ĉielo staras malalte super la Turo. La ŝlimsimila Tamizo senonde kaj senbrue fluadas kvazaŭ perfortite. Jen ŝvebas velŝipo sub la Turo! Ĝia blanka flugilo neregule triangula restas sur la trankvila akvo kvazaŭ por ĉiam senmova. Du ŝarĝoŝipoj kunligitaj suprenveturas la riveron; ŝipisto staranta sur la postkilo remadas kaj remadas; ili restas ankaŭ preskaŭ senmova. Proksime de l' ponta balustrado flirtas blankaĵoj, eble mevoj. Ĉio estas trankvila, laca kaj dormema. Impreso de l' estinteco! Kaj meze de tia atmosfero staras la Turo kun malvarma mieno, kvazaŭ ĝi malestime malsuprenrigardus nian centojaron. Ĝi kvazaŭ volus diri: "Veturu trajnoj! Veturu tramoj! Mi tamen staras ĉi tie tiom longe, kiom la homa historio daŭras." Kun miro mi refoje rigardas la grandiozan skalon de l' Turo. La konstruaĵon oni ja kutime nomas turo; ĝi estas tamen efektive grandega kastelo konsistanta el multaj turoj diversformaj, aŭ rondaj aŭ angulaj, ĉiuj tamen same melankolie cindrokoloraj, kvazaŭ ili volus al ni rakonti diversajn memorojn el la pasintaj centojaroj. Supozu al vi ŝtonan konstruaĵon kelkdekoble pligrandan ol la Milita Muzeo sur Kudan,[8] kaj supozu al vi, ke vi trarigardu ĝin tra lupeo. Kaj nur tiamaniere vi povus al vi prezenti la grandecon de l' Turo. Mi daŭre rigardas ĝin, rigardadas ĝin, nenion pensante kaj starante en la sepikolora aero saturita per malsekeco. La nuntempa Londono iom post iom komencas malaperiĝi en mia koro, kaj el la Turo antaŭ mi staranta ekaperiĝas la vizioj de l' historia estinteco, kvazaŭ la vaporo eliras el la tetaso ĉe matenmanĝo kiel daŭrigo de l' sonĝo ĉe la nesufiĉa dormo en la pasinta nokto. Iom poste mi sentas fortan altiron de ies longa brako trans la riveron. Mi, ĝis tiam senmove starinta, subite decidas viziti la Turon. La longa brako altiras min pliforte. Mi tuj komencas transiri la Turan Ponton. La longa brako altiras min

7) The Tower Bridge.

8) Parko en Tokio, kie staras la templo dediĉita al mortintoj por la patrujo.

pli kaj pli forte. Mi rapidege transkuras la Ponton, ĝis mi atingas la pordon de l' Turo. La giganta magneto de l' estinteco okupinta pli ol 10 hektarojn fine altiris al si tiamaniere la malgrandan ferpecon pendantan en nuna epoko. Trairinte la pordon mi rukrigardas:

Trairu la Pordon, kiu volas viziti la regnon de ĉagreno!
Trairu la Pordon, kiu volas suferi eternan turmenton!
Trairu la Pordon, kiu volas kunvivi kun mizeruloj!
La Plejaltulon igis la Justeco min konstrui per plej granda potenco, plej alta inteligento kaj plej unua amo.
Antaŭ mi ekzistas nenio. Ekzistas nur eterneco. Mi toleras por eterne.
Forĵetu ĉiun esperon, kiu trairis la Pordon!

Mi vane serĉadis la surskribaĵon sur la Pordo. Mi estis jam tiam tute perdinta mian konscion.

Mi iras trans ŝtonan ponton konstruitan super sekiĝinta foso. Jen staras kvazaŭ du gigantaj kolonoj paro de ŝtonaj turoj similaj al grandaj petrolujoj. Mi trairas la konstruaĵon, kiu kunigas ambaŭ turojn. La Meza Turo[9] ĝi estas. Iom pliantaŭe staras maldekstraflanke la Sonorila Turo. Sonoradis, kiam feraj ŝildoj kaj ŝtalaj helmoj de malamika armeo alproksimiĝanta dense kovradis batalkampon kvazaŭ aŭtuna nebulo. Sonoradis, kiam kaptito forkuris de l' okuloj de gardistoj ĉirkaŭirantaj sur la murego kaj malaperiĝis en la mallumon de stela nokto trans la lumon de torĉoj lin ĉasantaj. Sonoradis, kiam fiera popolo amasiĝis kiel formikoj sub la Turo por denunci la maljustecon de l' reĝo. Sonoradis ĉiam, kiam io okazis. Sonoradis kaj sonoradis. Sonoradis, kiam oni mortigis disenditon. Sonoradis, kiam oni mortigis sanktulon. Kaj kie nun staras la sonorilo, kiu sonaradis tiel ofte en frosta mateno kaj neĝa vespero, en pluva tago kaj venta nokto? Kiam mi suprenrigardis la turon hedervinditan, mi tamen nur povis ĝin trovi obstine daŭriganta sian silentadon dum pasintaj centojaroj.

Mi iras iom pliantaŭen. Jen troviĝas dekstraflanke la Perfidula Pordo,[10] super kiu elstaras la Turo de Sankta Tomaso.[11] Kia nomo teruriganta! Miloj da kondamnitoj vivante entombigotaj en la Turon estis tien-ĉi perŝipe gardosendataj. Trapasinte la Pordon ili neniam povis revidi la sunon de nia mondo. Tamizo estis por ili Stikso kaj la Pordo la enirejo de Hadeso. Ili estis alportata trans la riveron de larmoj ĝis sub la arkado kvazaŭ groto malluma. La baleno malfermanta sian faŭkon atendas la fiŝetojn. La pezaj pordoflugiloj el kverko knaras kaj apartigas ilin por ĉiam de l' lumo de nia mondo. Ili tiamaniere fariĝas la viktimoj por la Demono de Fatalo. Kiam ili estos buĉataj? Ĉu morgaŭ?

9) The Middle Tower.

10) The Traitor Gate. 11) The St. Thomas Tower.

urbo, mi povas resti en ĝi sufiĉe longe aŭ eĉ tute ne forlasi ĝin であるが併し irante tra la urb*on*, mi œlas (tra la urbo) *eksteren* de la urbo. である。"Rabistoj" の中で Schweizer が "la sono de lia nazo povus peli homojn tra truet*o* de kudrilo" と云ふてもよいがしかし "tra truet*on*" といふ表現の方が sono の効果が大變大だから從つて人は必ず外へでゝしまはねばならなくなると云ふことを示す故遙かに一層强い意味である； こゝに於ては trueto それ自身が重大でなく唯できるだけ早く trueto の外にくると云ふことが大切である。

(La Revuo, 1908, Februaro.)

運動の動詞の後の目的格

若し "meti" (或は "ĵeti", "fali" 等)に續いて "antaŭ" "post", "inter" 等の前置詞の附いた名詞若くは代名詞が來るならば通例其名詞又は代名詞を目的格にするのが一層正しいでせう，その理由は通常此場合には方向の意味があるからです； 例へば "metu la korbon antaŭ la pordon"。併し若し方向の意味が我々の話す名詞又は代名詞に關聯するのでなくてその言外に認められる或る他の語に關聯するのならばかゝる場合に屢主格を用ひても誤ではない；例へば我々は "oni metis antaŭ mi *sur la tablon* manĝilaron" の意味で "oni metis antaŭ *mi* manĝilaron" と云ふてもよいのである。かゝる場合には主格も目的格も等しく使用し得るのであつてかゝる場合に專ら主格だけとか專ら目的格だけとかを用ひよと決定するの必要がないように思はれる。若し他日この關係に於ける自由さが我々にとつて大變迷惑になり且その生命それ自體が次第にこの問題を決定することができなければ我々は言語委員會に向つて此の問題に對してどちらかを專用すべしといふ決定を與へられんことを提案することとなりませう。——"sid'ĝi" の後には我々が運動を表はすのか或は新しい狀態の開始を表すのかに從つて目的格か主格かを一樣に使用してよいのである。併し主格は目的格よりも單純であり平易であるが故に我々がすべての疑はしい場合においては常に主格の方を擇ぶといふ習慣をつけるならば大變いゝことだと思ふ。

(La Revuo, 1908, Majo.)

形容詞

副詞と形容詞

第二書 ("Dua Libro") が著された當時では "estas varme" と云ふべきか "estes varma" といふべきかの問題は猶未だ絕對に決定されてゐなかつたそして其の一方の形を使用するのも他の形を使用するも全く等しく正しかつたのである。が今やこの問題は漸次に用例によつて旣に一定の決定をとるに到つた。

形容詞は名詞及び名詞の意味を有する代名詞 (kia の問ひに應じて) を限定し副詞は動詞 (kiel なる問ひに應じて) を限定する。故に我々は "la vetero estas bona", "li kantas bone" と云ふ。併しこの限定が精密に名詞或は代名詞に屬せず動詞にも屬しない場合には我々は屢我々の限定が如何なる問ひ (kia 或は kiel) に應ずべきか如何なる形を用ふべきかを決定的にのべることができぬ。他のすべての言語ではこの疑問は使用といふ批準によつて決定されてゐる，—— 我々の言語に於てはかゝる場合常に副詞を使用することをお勸めする； 例へば "estas varme", "estas vere" "ĝi estas vera" とする。我々は常に ("li" が人の代用たる如く) "ĝi" といふ語を物或は事の代用としてのみに用ひることをお勸めする； 併し人物もなく物もない表現に於ては決して "ĝi" なる語を用ひない (例へば "hodiaŭ estas varme" として "hidiaŭ ĝi estas varme" とはしない) やうにお勸めする。

(La Esperantisto, 1891, p. 7.)

冠詞

若し la 及び l' なる形を如何なる場合に用ひればならぬかが判らぬ場合には常に la の方を使用されるのがよいのです。私は l' の形を通常母音で終る前置詞 (例へば de, je, tra 等) の後に於てのみ用ひてゐます； 其他のすべての場合には私は通常完全形 la を用ひます，何となれば斯くせない時は意味は不明瞭になり發音も亦不快になるからです。

(La Esperantisto, 1889, p. 24.)

冠詞の語尾省略

實際“reunuigi l' homaron”と云ふ云ひ方はよくないのです，何となれば冠詞の語尾省略は單に母音を以て終はる前置詞の後でのみなし得るのだからである。併しながら“Gramatiko”（文法）の中でなく單に“Ekzercaro”中で（§27）與へられた法則を顧みないことは誤（eraro）ではなく其れは單に文體（stilo）の boneco に反する過ち（peko）である。從つて散文（prozo）に於てこの法則は顧みられなければならないが韻文（versoj）に於ては詩人の特權（“licentia poetica”）によつて普通の文體から脇道へ外れることは屢々ゆるされること故上に述べた法則（一層正しく云へば konsilo である）を無視することは誤りとはならない。韻文に於ては文法（gramatiko）から背反すること（例へば屢々初步のエスペラント詩人にみる所の形容詞の省略やいろんな文法に背反する語形の使用等）のみを『誤』と云はればならない。

(La Revuo, 1906, Decembro.)

人稱代名詞

“ĝi”の代りに“li”の使用

貴君は『子供（infano）を動物や事物と同一の段階に置くといふ英語風の慣習』を承認できぬから子供については“ĝi”の代りに“li”を用ひやうと云つて來られた。かゝる場合における“li”の使用に反對の何物ももたぬでありませう；併しながら我々（及び英語）がかゝる場合に“ĝi”を使用する理由は貴君がお考へになるのとは同じでないのです。決して英語も亦エスペラントも子供の價値を低め謙といふ意向をもつてゐるものではない（兩語とも子供は勿論動物や事物に對してさへ“vi”といふ語を用ひるほど丁重な言語であるのです）。其理由は上述の兩言語の構造から來る自然の結果であります。すべての言語に於てすべての語は（全く非論理的に）一定の性をもつてゐる，其故に或語に對する代名詞を使用するに際しては其語の文法的の性に對應するものを採るのである（故にフランス人は子供に對して“il”を用

屢諸君は冠詞 la の不便を繰返へして述べられます。併しながら冠詞は實に全く特種の語であつて文章の構成上には何等の影響をもなさないものです；それ故に若し諸君がお望みならば少くとも諸君が全く十分に冠詞の意義を知るに到る時期まででそれを全然使用されなくてもよろしいのです。 (La Esperantisto, 1890, p. 32.)

"l'" の 使 用 法

我々は "l'" ("la" の省略)の使用をやめたのではありません。併し此の形は甚だ必要な法則中の例外といふ譯でもなく又これが特に韻文に於て短くする爲に考へ附いたものでもありますから我々は散文に於ては通例不變の "la" なる形を用ひ省略形は特に韻文に於てのみ用ひてゐるのです。大抵我々の雜誌ではこういふ風にやつてゐます；併し我々はこれを規則にしようといふのでは決してありません；誰でも散文に於ても省略形を使用することができるのであります。

(Esperantisto, 1893, p. 127.)

冠 詞 の 用 法

冠詞の使用について貴君は無駄な大變な努力をされてゐます。我々の言語に於ては冠詞の使用は強制的のものでないと云ふことを御記憶下さい；從つて最もよいやり方は次の如くです：冠詞の使用が必要であり論理上要求されてゐることがしかと判つてゐる場合には冠詞を使用して他のすべての疑はしい場合には全然冠詞を使用しないこと必要な場合に冠詞をつかはぬといふことは論理やあらゆる國民の習慣が禁ずる場合に冠詞を使用することよりも遙かに許さるべきことです。例へば若し貴君が "venis tago, kiun mi tiel longe atendis" と云ふならばその文は全く bonstila とは云へないが併し この場合 "*la* tago" と云ふべきであろうとも直接に誤でありません；併しながらもし "hodiaŭ estas dimanĉo" の代りに "hodiaŭ estas *la* dimanĉo" と云ふならばそれはすべてのよいエスペランチストの耳にとつて聞き苦しいものであり全くの誤りであります)． (La Revuo, 1906, Decembro.)

急告

九州エスペランチスト聯盟懇談會

期日：四月十日（日曜）午前十時
場所：福岡市西中洲カフエー•ブラジル
會費：一圓（當日持參の事）
順序：午前…日本エス大會につき協議
　　　午後…東亞博覽會及西公園櫻見物
申込：四月五日迄、下記宛

福岡市大名町 3 の 105　日本エスペラント學會福岡支部

本誌二月號正誤表

頁	欄	行	誤	正
50	左	14	ne previlegiitaj ノ次へ	（チ入レル
〃	〃	24	〃 moti-o " ノ次へ	）チ入レル
〃	〃	26	から, Ŝoguno	から。Ŝoguno
〃	〃	—14	ra:n	ra:n
〃	〃	—13	espe'ra:nt	espe'ra:nt
〃	〃	—8	Srmfield	Armfield
61	左	—14	Rob'nsono Krusa	Robinsono-Krusa
〃	右	—18	kaj....	kaj....〃
〃	〃	11	kutimo	kutima
63	左	1	ietensan	intensan
〃	〃	13	dronantoj	dronontoj

──エス運動のため同志諸君の御援助を望む──

我邦エスペラント運動に一新紀元を劃せんとする日本エスペラント學會出版部の今回の快擧に對して

各地同志諸兄の御援助に訴ふ

今回當學會で出版の「エスペラント捷徑」を四大賣捌店の手を經て全國各地の一般書店へ配本して販賣する事に致しました。

誰しも經驗がある樣に近所の書店で欲しい本が買えない程嫌な事がありません。エスペラントの書籍が最寄の書店で手に入らないためエス語を學ばないでゐる人が可成澤山居ると思ひます。

一般の雜誌や小説等は近所の書店で買へるからこそ飛ぶやうに賣れて行くのです。あれが一々振替で送金して購入するのだつたらどうでせう。實に想像してみてさへ不便ではありませんか。しかも我々エスペランチストは從來此不便を堪え忍んでゐたのですが何時迄もこんな事ではエス語の普及發展がどうして望まれませう。

かく考へました結果當學會ではまづ「エスペラント捷徑」の新刊を機として之を全國書店へ配本する事と決心しました。

所で御承知でも御座いませうが全國書店へ直接配本する事は發送や集金の手數が大變ですからどこの出版所でも大賣捌店へ委託して配本して貰ふのが普通です。所で大賣捌店と雖も僅かな口錢で手數が頗る雜ですから兎角賣行の惡い本は取扱つてくれません。

右の四大賣捌店でも一時はエス書の賣行を危んでゐましたが當方の熱心にほだされて引受けてくれました。そして各店共百冊宛預つてくれまして即刻配本してくれました。併し其賣行は相當危ぶんでゐる樣です。そしてもし今回預けた四百冊（總計）が向ふ六ケ月間に賣り切れなければ『エス書は賣れぬもの取扱へば損するもの』として今後は一切取扱つてくれなくなりませう。即ち今がエス書の信用を得るか否かの危急存亡の時であります。

『捷徑』も四百冊や五百冊は二三ヶ月間に賣れてしまふとは思ひますが併し學會へ直接注文が多くて何千冊賣れても大賣捌店へ委託した四百冊が賣れ殘る樣では大賣捌店でのエス書の信用はゼロであります。即ち今回大賣捌店へ預けた四百冊が六ケ月間に賣切れなければ駄目なのです。その代り若し今回大賣捌店へ預けた四百冊が一二ヶ月中にスツカリなくなつて學會へ追加注文がくる樣になれば『エスペラント書は相當賣れるもの』との信用を得る事となります。

そうなれば今後も續々大賣捌店の手を通してエス書が全國の各書店へ完全にゆき亘る樣になりエス語普及も一層容易になりあらゆる便宜が大いに加はる譯でございます。

即ち此の六ケ月間が最も大切な時期でございます。ですから學會を愛しエスを愛せらるゝ各地同志諸兄は當分の間直接學會へ御注文下さらずに近所の書店へ「捷徑」を御注文下さる樣又御知り合の方々へも御勸め下さる樣特にお願ひ申ます。

尙當學會出版の他のエス書はどれでも御近所の書店へ御注文になれば届きます。

近所の書店でエス書を御注文になる事はとりもなほさず大きなエス宣傳になります。又近所の書店へ御注文になれば振替拂込の手數もなく送料も振替料金も不用であり途中紛失の虞もなく總べての點で便宜多大であります。

近所の書店へ御注文の際は此頁の右の點線から切りとつて御持參になつたらもつとも便利だと思ひます。

同一地方に住む同志諸君はなるべくまとめて一、二の書店へ注文を發せらるゝ方一層有効と思ひます。

近所の本屋でお買ひ下さる際には

1. 學會の住所や大賣捌店をハツキリしらせる必要がありますからできるなら本廣告の右の點線から切取つて書店に渡して下さい宣傳上にも有効ですから
2. 本屋の中には最初は面倒がつて取寄せてくれない所があります何度でも督促して下さる方が宣傳に大變有効だと思ひます

本誌購讀料(郵稅共)		
一部	24錢	學會々員には無代頒布す
半年分	1圓40錢	
一年分	2圓60錢	

本會振替口座番號
- (基本金專用)東京三〇八九番
- (一般)長野三二八三番
- (會計用)東京一一三二五番

廣告料

	1回	3回	6回	12回
全頁	25圓	72圓	140圓	250圓
半頁	〃13	〃37	〃74	〃130
四半頁	〃7	〃19	〃38	〃70

◆金錢に關係なき廣告四割引
◆表紙第三頁は二割增の事
◆表紙第二頁第四頁はお斷り
◆特別會員の廣告は二割引

昭和二年二月二十五日印刷
昭和二年三月一日發行

編輯兼發行人 大井學 東京市牛込區新小川町三ノ十四
印刷人 高見澤保芳 東京市神田區西小川町二ノ五
印刷所 株式會社一匡印刷所 東京市神田區西小川町二ノ五
發行所 財團法人日本エスペラント學會 東京市牛込區新小川町三ノ十四